



7586

具流齋貞水

溝演

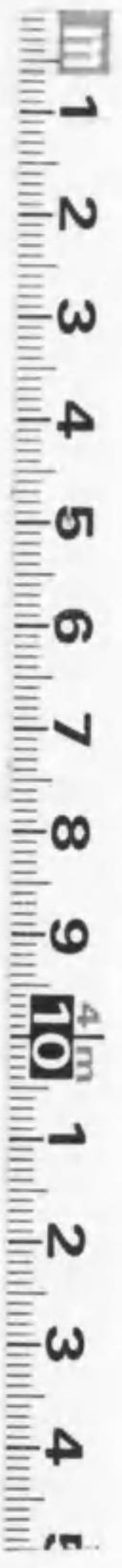
東京日々新聞

社負速記

朝日奈

二郎

東京
文華堂
發行



始



序

朝夷の武勇は三才の童兒も皆能く之を聞知す然れども此人
 惟に強勇のみならず仁義の志深き予該傳を閲し茲に始めて
 智仁勇の備の良將たるを感す凡そ古への武人自己の勇猛
 を恃んで往々仁義の道を欠く者あり朝夷三郎の如きは然ら
 ず進んで戰場へ臨む時は万夫不當の武勇を顯し殆ど鬼神を
 恐歎せしめ亦退ぞひて平時に在ては能く仁義の道を守り優
 にして柔和しく婦女子すら其仁心厚きに感泣す所謂花は櫻
 樹人は武士とは蓋し是等を指して云ふ可き乎貞水師が快辨
 向一層朝夷の英名を輝かさしむ倅ひに諸彦愛讀をたまへ

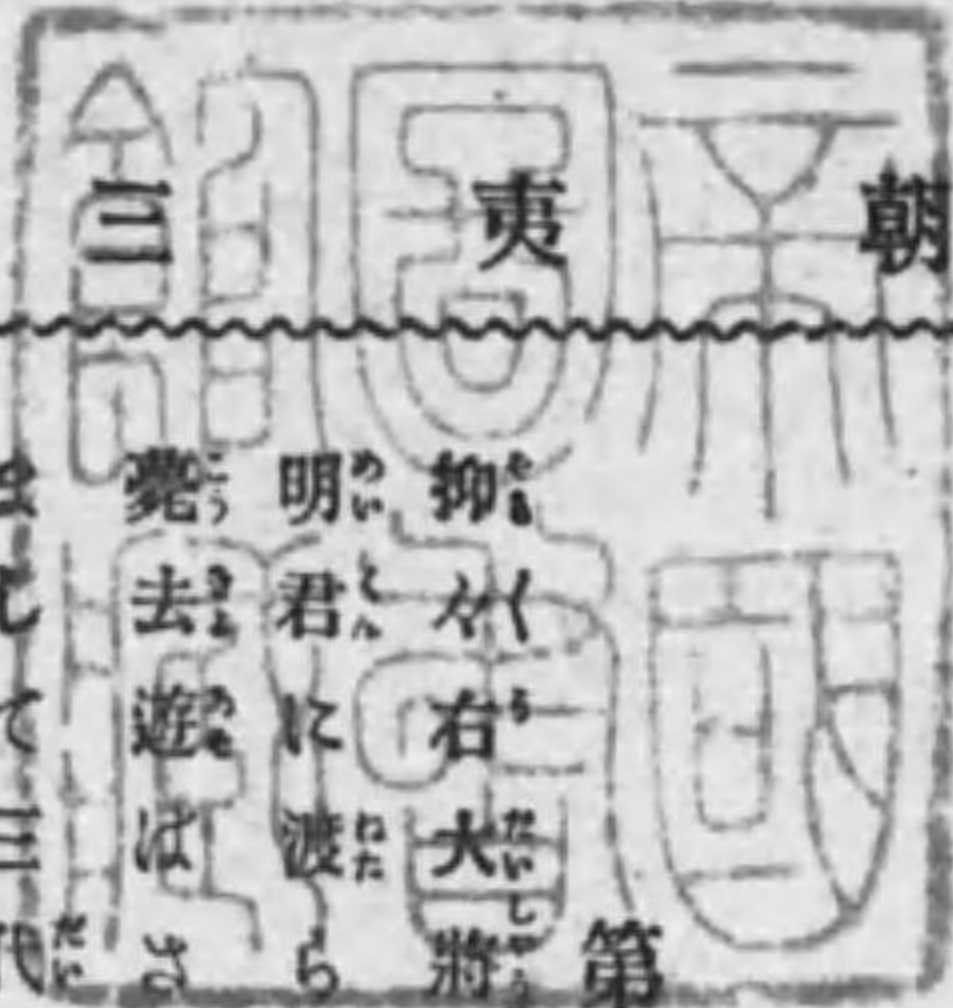
増の舎主人識





朝夷三郎

眞龍齋貞水講演
東京日日新聞速記



第一回

間まの折せ合あが誠まことに悪わるう御座ごまゐいます、といふのは北條きたじょうと云いふ奴やつは
 輩はの頭かぶ領りやう和田わだ左衛門尉ざゑもんゑい義盛ぎせいで御座ごまゐいます、
 の子こ息いきで御座ごまゐいます、諸士しよしの別當べつたう職しやくを勤つとめまはす人ひとは三浦みうら九く十じゆ餘よ
 先ま名な江間ゑま小四郎せうしやうと申しました人ひとで即すなはち北條きたじょう四郎しやう事こと遠とほ江守ゑまゐ時とき政まさ
 まして三代だいの實朝じつちゆう卿きやうの御代ごだいには鎌倉かまくらの執權しやくけん北條きたじょう相模守さまのまゐり義時ぎとき
 薨去きりぞ遊あそばされ二代だいの頼家よりか卿きやうも伊豆いずの修善寺しゆぜんじにて御薨去ごきりぞにあり
 明君あきみに渡わたらせられまはすが併ひらし未いまだ御弱年ごじやくねんで御座ごまゐいます、頼朝よりちゆう公こう
 抑おさぐ右大將みぎだいしやう源頼朝げんよりちゆう公こうの御三代ごだいは實朝じつちゆう卿きやうで御座ごまゐいますして誠まことに御
 朝夷三郎あさひさんりやう

朝夷三郎

奸曲にして權柄を振ひ既に鎌倉の天下を己れが併吞致さうと云ふ志が御座います、されば忠臣の者を讒言致しまするゑと夥しく、梶原、畠山、仁田等鎌倉に於て名に聞えたる侍士が皆其口に

朝夷三郎

する松島と申す女で今日の御歌の秀逸は松島の局ありと言はれたから若侍士共が其姿を見ますと鎌倉隨一の美人、ピッ

シア、美しいものぢや。と皆々賞揚して居ります、其若侍士の中に居られしは時の執權北條相模守義時の次男相模次郎朝時と申します侍士局の姿を一目見るよりアツとする程戀風が染み渡りまして邸へ歸りましてもサア局の事を寸時も忘る暇をく寝ても局が枕下に居る様子が見え飯を食はんとすると膳の前に局が斯う見えまする、寢食も忘れて戀ひ慕ひましたと思ひに堪へ兼ねて斯うくと玉章を認め傳手を求めて松島の許に送りました、其時局が此文を直ぐ戻したら別段事は起りませんでしめたらうが時の執權北條義時の次男ともあらう者故仇なく恥しめては氣の毒の至り此方で取置いても返書さへ遣はさずば仔細あるまいと其文を取つて置かれた朝時の方では文を先方で受取つたから早晩返事があるであらうと唄が夫を待つ様に首を長くして待つて居りました、けれども腫んだ物が潰れたと

四

云ふ挨拶も御座いませぬ 朝時「彼の女返事を忘れたか知らん物覺いの悪るい女ど見ねる、ロソ〜」モウ一遍遣らう。と亦書いて遣はしました、今度も取つ放し 朝時「ハ、ア已れの心を引いて居ると見ねる三度の神は正直だ。と根氣の好い奴で又文を書いて送りました、すると此三度目に先方より戻つて来た物がありません、朝時「借ては返書であらうかと披いて見ると自分の書いた文が三通とも戻つて来たので御座いました、文の肩へ膠脂筆で何月幾日何時何十分着第何號と番號まで記して返へして来たさうです、是れはマア當にはなりませんが随分酷な取計で御座います、次郎朝時佛然として怒を爲し 朝時「誰あらう執權職北條義時の次男相模次郎朝時ともあらう者に恥を與へるにも事を飲き三通の玉章を一時に戻すと云ふ事もある不届ある女め男子の思込んだる一念ヤツカ晴らさで置くべき

五

か。と翌月の和歌御集會を待つて居りました。が其翌月の和歌御集會遅刻致して夜に入りしを幸ひ朝時はお奥の表の間中奥のふ疊廊下と云ふ暗き處に竊んで局の歸りを待つて居ります。と松島の局は斯る奴が忍び居るとは夢さらず石山寺の秋月を縫ひ現はせし福福の捌きも夾かに片手に雪洞を携へお疊廊下に掛つて参りました。

第二回

朝時は暗い所に居りましてパツと映す雪洞の光に女の姿を見ます。と夜目、遠目傘の内、と申しまして、女中は夜見たり遠く見たり傘の内で見ます。と一層別嬪に見はますもので、遠くから見てハア美しい女だと思つて側に往つて見ると後辨天前不動杯と云ふ奴に出會す。とがございします。然るに是れは眞から別嬪を夜燈で見るので、げすから實に輝妍なものでございす。

朝時借ては参つたナ。と思ひました。から猶暗き所に姿を隠して居りまして局を一足遣り過さじ不意に飛び出して朝時「ヤッ。と言つてハラリ雲洞を打落しました。から猶は消はてしの闇、是れはッ。と驚く松島をものをも言はせ後から 朝時「ムーン抱き縮めました。大概な者ならば「キヤッ。と聲を上げる所おれども道は局役の松島、局が据つて居ります。から一度は驚きました。が抱き縮めた。其手を斯う撫でて見ます。と狐狸の悪戯ではなく人間の手に相違ございせんから 松島「何人でございませるか。御戯れなさるな、お人違ではござらんか。松島に候を致され、此手を御放しあるやうに……と振放さんと爲すを猶も確乎抑へて放たばころ 朝時「否人違ひではござらん、三通の玉章にて拙者の名前は夙く御存知でござらう、松島「北條義時の次男朝時でござる、御身の姿を見し以來煩惱の犬逐へども去らず

朝 夷 三 郎

善提の鹿招けきも来らぬ心の丈けを洩知らせ申さんと玉章を
三通まで差上げしに色好き御返事なきのみか彼の三通の玉章
を一度に御戻しとは餘り無情の御計ひではござらぬか、さは
れ思ひ込んだる男子の一念徹さで措かじと今宵此場に待受け
て斯く御抱止め申してござる、サア局色好い返事を下さらば宜
し次第に依つては此朝時覺悟を致して罷り在る、否やの御返事
此場に於いて速かに御聴かせ下されよ。と退引させぬ釘鐘、松島
の局は、借ては朝時にてありしか。と大いに驚きました。が、嘴すに
如かやと聲を潜め、松島、誰人かと思ひしに朝時殿にて候ひし
か其許様より賜はりし玉章一と目見参らせし其折には妾も飛
立つ程に思ひしか。不義姦通は天下の禁制、是等の事が表に知
る、其時は我身上は苦しうふけれ。其許様の御身上、亦御父上
北條殿の御身分にも關る事と飛び立つ心を抑静め思ひ切つて

朝 夷 三 郎

御戻し申上げたる彼の玉章、必や悪う思ひ下さらぬやう、何も是
迄のみと、御諦め下されて何卒此手を御放し下さりまするや
う……と斯く色を合んで断りを申します。朝時之を聴きま
して、朝時借ては強而断りと思ひさや、然る御心にておはせし
か忝けない、其許の爲めならば斯く言ふ朝時命を捨て、も大事
ござらん、其御心ならば情を此場に賜はれ。と急遽に其場に押
轉し、呀哉悪姦を致さうとするから松島の局も今は堪り兼ね
松島「アレエー誰ぞ……」と大聲を揚げました。お奥か表打混じて
の和歌の御集會でござりまして若侍士も女中も混つて居りま
す。から何の様なる間違もやと豫て視廻と云ふ者を附けて置き
ます。今日の當番は朝夷三郎義秀で是れぞ即ち和田義盛の三男
で、此講談の主人公でございす。詰所に扣ねて居ります。と絹を
裂くやうな聲がお疊廊下に聞えにます。から何事やらむと立ち

出でて聲を知らず女是れは
御身分も御執權北條殿の御次男にては候はせや御場處柄をも
願みせ其る不法の御舉動は何事を御許し下されと言ふをも聞
かき呀哉と見ねたる其折しも進み寄つたる朝夷三郎義秀次郎
の襟首ムンヅと掴みものを言はずウーンと宙に引吊しまし
た、義秀は大力無双の侍士己れの方で己れの方の度を知らぬと
云ふ底抜力ろれに襟首を掴へられた引立てられた様は宛然秋
水魚を規つた泥棒猫が掴へられた様な盃梅局は起上がつて通
げやうとする裳裾を取つて引戻し之れをも朝時と共に小脇に
抱込んで己れの詰所に連れて参り、踏いて居りました燈を吹消
し眞暗に致して置いて二人を其場に引据え義秀何者なれば
君の御座近き處にて斯る不都合なる舉動を爲さるぞ是より
問注所に引立て参りなば不義の大罪は免れまじ併し若氣の至

りにて致せし事からん今日の所は御赦し致すべし暗きより暗
きへ御連れ申せし事故に面体も存せず且つ御名前も承らねば
今後此義秀に會はるゝとも別に呪づる處はあかるべし以後は
乾度御慎み下さるやう御異見申す。と先づ松島の局を戻し置き
少時経つて朝時をも放ち遣りましたから朝時は鼠舞を致して
己れの邸に逃げ歸りました松島の局は自分の部屋に立歸り呻
と吐息をつき松島危い所へ朝夷殿が御出に成暗きより暗き
へ御連れ下されて御異見下されし其上に御見遣し下されし御取
計ひ、御經致と云ひ御氣質と云い御武勇の程と云ひ御家柄は三
浦九十餘輩の頭領和田殿の御三男、女ど生れしからは生涯を彼
の様を殿御に任せなば嗚かし女子冥利に叶ふことならん……。
と斯く思ひましたがイヤ事の間違と云ふものは仕方のないも
ので松島の局が朝夷三郎に鮫書を送りしより事起りて遂に和

田北條の間に大葛藤を惹起する事になりました

第三回

朝夷三郎

松島の局は朝夷三郎義秀の親切を喜び之れに心を通はせました
たが其様子が召使の賤機と云ふ者に見えましたものと見え
賤機何か旦那様には御心に思召す事とが有らざれば御
様子、當節は爵々となされて、御座りませうが何事にて候か妾の
及ひまするゑとなればどのやうにも尽しませう心得、どうぞ御隠
しなく仰せ聞けられて下さりまするやうに……と迫りました
に依つて局は恥かし氣に 松島實は朝夷義秀殿を想ふて、云
ふ言葉が出ましたから 賤機、うれなれば玉章を御認め遊ばせ
妾御取次を致しませうと云ふので玉章をば認めさせ之を持つ
て朝夷義秀の許に参り手渡しを致しました、すると三郎、それを
取つて置かれませんでしたから賤機も安心を致して歸つて参り賤機

朝夷三郎

申上げます義秀様に御目通りを致し、差上げました所、お
嬉しさうお顔を遊ばして御受取りで御座いました、早晩御返
事が御座いませうと云ふのを聴いて松島も大きに喜び、今か
と待つて居りましたが待てども、返事が参らぬからどうし
たふと、かと思つて居りますと、賤機が是れは未だ御若年で御在
おさるによりお恥かしいが山々で御文の御出しはぐれかど見
えませ、いま一本御誘ひの御文を御書き遊ばせ、と言ふので又
いて送りましたが又、それを取返し、松島、どう云ふ譯であらう
のう、賤機、ナアニ貴女三度の神は正真で……と今度は局の方
で三度文を遣るやうお譯にかりました、三郎義秀をればどて木
竹の身では御座いませぬから、懇々と云ふと、を知らぬ、とはな
い、人間と生れて戀を知らぬと云ふ、然様を者は決してない、戀せ
ずば玉の杯底無きが如し、其情に薄いと濃いの差別はありま

朝 夷 三 郎

すけれども全然男ど生れて女の嫌いの者なく女ど生れて男の
嫌いな者は御座いますすまい然るに三郎義秀が局より三通の玉
章の参りましたのを返事を遣はさず之を取置いたのは即ち
謹慎の好い人かので先方から文か来た讀んだ直ぐ返事を遣
杯と云ふ粗忽かあるを爲らぬ三通の玉章を一時に其處で披
いて見ますと始に來た父は飾つて認め二度目に來た玉章は平
易に認め三度目の玉章が其文至れり盡せり口にも言へまいと
思はるゝ程の實情が筆に十分籠り居りせずし而も此鎌倉で人
に知られた松島の局なるによつて吾妻に致しても恥かしから
ぬさらば之を迎へむと斯う云ふ志を起して朝夷三郎義秀三通
の玉章を懐中致して己れの兄和田新兵衛朝盛の部屋に参りま
した是れは和田義盛の次男で朝夷三郎義秀は中三権頭兼遠の
娘巴の腹より出生を致したる者で實は和田義盛の胤から

朝 夷 三 郎

す木曾義仲の胤ぢやと申すもど御座いますされど先づ朝盛
の子と致してありますから朝盛は義理ある兄さん其朝盛の
前に來て義秀兄上御機嫌宜しう朝盛は是れは三郎朝盛は
徒然で私が所へ歸にでも來て下されたか義秀ハイ些と愚案
に利ります事故兄上の御智慧を拜借致しに参りました朝盛
ハ、ア何かは知らぬが前には謙倉で若年とは言ひながら智勇
兼備の開えある人ぢやうれに反して私は誠に愚鈍な者其の私
に思利つて相談とは何事ぢや義秀別儀には候はせ之をさう
ぞ御讀み下さるやう願ひますと懐中から三通の文書を出しま
した之を見て新兵衛朝盛は「イヤ」お前は博學多才にして己
れは無學文盲ぢや何か中に分らぬ文字があつて尋ねるのぢや
らうがそれは甚だ困る分りはしまし己れには……
然様なものでも御座らぬぞうぞ御讀みを願ひます
朝盛然様

か、然らば拜見を致さうと兄朝盛はうれを取上げて恭しく押戴
きました、尤も人が持つて来たものを、オイ見せねエ。と言つて直
ぐ奪つて見る杯と云ふのは甚だ失禮千万なる譯で、朝盛は之を
恭しく押戴き扱抜いて見ると女から来た艶書で御座いますか
ら大に驚きました 朝盛、三郎是れは何ぢや、婦人よりお前への
艶書ではないか其方は斯る情弱な者とは思はざりしに思ひの
外見下げた奴ぢや、現在の兄の許に來り女の惚に事を欠いて證
據を持つて來る奴があるか、甚だしいことだ 義秀、イヤ御立腹
恐れ入りますが御覽遊ばして御合點で御座いませう、初度に參
つた玉章には「チラと見參らせし其日より寐ては夢起ては現幻
の……」 朝盛「コレ、大概にしおさい實にさうも驚いたナ、お前發
狂てもしはせんかい 義秀、決して手前亂心は致しません斯く
松島より三通玉章を送り參りましたなれども私は一言の返事

をも仕りません、然りながら之を此儘に打捨て置きまするも不
憫の至り、未だ拙者無妻の事故に何卒此儀を將軍へ御願ひ下さ
れ局を吾妻として迎へられまするやう兄上より仰せ上げ下さ
れ表向之を娶りて宿に差置きたく、万事は御計ひを願はむが爲
め罷り出まして御座います。

第四回

朝盛聞いて碯と手を拍ち 朝盛、遠がは義秀だ、適れ大丈夫感服
致した、今鎌倉にて人に知られし美婦人、松島の局より玉章を贈
られたらんには心の動くは男子の常、然るに之れを三通共取置
きて返事も致さず、其志を見貫いて宿の妻に致したい娶りたい
と吾許に公けに申し出づるとは誠に感服の至り、うれであらう
夫なれ、夫婦となつて仲睦まじきは此文体に依つて判然たり、然
らば將軍に申上げ此縁談は十分取結ぶべし、其許にも吉左右相

朝 夷 三 郎

待つべし朝盛請合ふたりと言ひましたから朝夷義秀人きに喜
び何卒宜しく御計らひを願ひます。と新兵衛朝盛に別れて歸り
ました。諸新兵衛朝盛は其翌日御前へ伺候致しました時に好き
折が有りましたから 朝盛弟朝夷三郎義秀未だ無妻に候へば
何卒松島の局を賜はりたく此願上げます。と申上げました。三
通の玉章が先方から来て居るから杯と云ふことは言へません
からうれば言はずに局を所望致しますと將軍は朝夷三郎義秀
が大の御意に入り御覺芽出度で座いませから 實朝公うれ
は誠に好い一對の雛ども謂ふべき夫婦似合ふみとであらう。と
仰せられました。が是れも將軍の御召使と云ふではなし御臺所
に使はれて居ります者でありませから 實朝公是れは御臺に余
が許より沙汰を致すであらうから……と仰せあつて是れから
御臺所に將軍から御沙汰になりませると御臺所も朝夷三郎義

朝 夷 三 郎

秀は大御意に入りのとで御座いますから 御臺所誠に一對の
雛ども謂ふべき夫婦である。と思召したけれども是れとても御
自分宜いと思召しても人間には合縁奇縁と云ふのがあるま
して又夫々好みのあるもの、色の白いのを好み黒いのを好み赤
いのを好み青いのを好む又面の長いのが宜いとか短いのが宜
いとか圓いのが宜いとか眼が大きいのが宜いとか細いのが宜
いとか鼻が小さいのが宜いとか大きいのが宜いとか夫々に好
みと云ふものがある。然れば此方ではかり宜いと思つても松島
の局が何と言ふか分らぬと斯う思召しました。三本文を遣つて
あると云ふものは御臺所些ども御存知ありませんから 御臺所
局を呼び出して能う尋し上御返事を申上げます。と將軍へは申
上げて置きまして。これより松島の局に御沙汰が御座いませ
から 松島何事ならんと思ひおがら 御臺所の御前に罷り出で

朝 夷 三 郎

、両手を支へ 松島御用に御座りまするか 御臺所オ、松島其
許を呼出せしは餘の儀にあらん、此度諸士の別當和田義盛の次
男新兵衛朝盛を以つて三男朝夷三郎義秀へ其許を配せ給はる
やうどの願を將軍へ申上げしにより吾君も誠に似合の夫婦で
あると仰せられ妾の許へ御沙汰になりしぞ、妾も一對の離似合
の夫婦と思ふにより其許を呼出して志を問ふのぢやが一生の
夫定め御臺の申付故拒むとはならぬなぞ思ひ違へて後日の
恨みを爲さざるやう宜しと思はば此場にて返事を申すべし若
し心に濟まぬば速に断りを言ふて大事ない、吾やの返事を申す
べし局どうぢやと云ふ有り難い御言葉で御座います、松島は之
を聞いて喜んだの喜ばないのと云つて宜いの悪るいの宜いの
それ所では御座ひません、足駄を穿いて櫓子を架けて昇つて昇
つて昇り詰めて階子の頂上に突立つて首丈と云ふので御座り

朝 夷 三 郎

ますければ、道がはか局様下方の悪摺女とは違ひますから、斯く
御臺所より申されます、ものも得言はず差俯いて眞赤になり
ました、美しい女が顔の時からぬ紅葉を散らしたと云ふものは誠
に結構なもので御座います、ナ、どうかする顔に紅葉を散らし
ッ放しと云ふ百獸屋の障子を見た様な顔の女があります、林檎
の怪物を見た様な紅葉を散らしッ放しと云ふ様な女は餘りッ
ッと致しません、が折ボツト紅くふりますのは誠に様子の好
いもので御座います、少時の間差俯いてモヨク致して指で疊
へ杖突き、乃の字、丸の字、山水天狗にへ、ノ、モヘヨ杯を書い
て返事も致し兼ねて居りましたが、思い切つて首を掻げ 松島
御上の思召誠に有り難き仕合せ、妾に於いては願ふてもかき幸
福、何分宜しく御願ひ申上げます、と云ふも勢一杯の言葉御臺所
然らば先方へ左様返事を致すべし、と仰せられて御前を下げら

れました、松島は自分の部屋に戻りまして、機嫌よく三通の玉章を差上げし所一言の御返事も下さらぬ故義秀様は強面御方と唯今迄御怨み申せしが、不義姦淫は天下の禁制と思召してか妾に御返事は下さらぬと公然改めて將軍へ妾を娶りたしとの御願を為されし由、今御臺所の御前にて委しう承りました、義秀様は未だ御若年にて御在で遊ばすに何とすれば彼の如く前後の御分別を御付け遊ばすであらうの。と惚れた愁目か萬事が程が好く見えす、豫てより燃る思ひの松島の局其吉日は何時ならんと指僕り數へて待つて居りませと、相摸次郎朝時は先達お中興る疊廊下に於いて局を捕つて抑へ強姦んと爲したる時に朝夷三郎義秀の爲めに防げられ己れの思ひの逢げざりしを無念に思ひ、此度もろは重なる念を晴らさんと已れの家の來を三名引連れ自身ども主従四人覆面頭巾の眞

黒扮裝、長刀を帯して御所の裏方に忍び入り、松島の局の部屋に往、局を縛り上げて萬籠に入れ、之を脊負ひ出して己れの邸へ往かんとし、圖らをも鎌倉御所の堀端に於いて再び朝夷三郎義秀に出會ひ、是れに因りて朝夷義秀の身の上は大難を醸すの件、次回に言上仕ります

第五回

相摸次郎朝時は朝夷三郎義秀と松島の局の事柄を一向心得ませんから過日己れが思ひしを仕損じたるを只管無念に思ひ、一度男が思い込んだる一念をいかにもして晴らさんと思ひ、まして己れの家來の心利きたる者を三人連れ都合四名が覆面頭巾の眞黒扮裝、暗夜にも光る長刀を佩び深夜に及んで御所裏方に忍入りまして局松島の部屋に往き、召使の賤機を柱に縛し付け猿轡を掛けて口の利けぬやうに致し、局にも同じく猿轡

を掛け之を縛めて葛籠の中に押入れ、家來に背負はせて御所内
を通れ出し、已れが邸へ連れ参つて否、應言はせ申思ひの丈けを
晴らさうと云ふ心底にて内廊から外廊の御太鼓御門と云ふ處
まで参りますと、チラリ燈が見えましたから、朝時三人の家來を
後どに致して先きへ立ち透かして見れば、鎌倉の視廻でござい
ます、南無三悪の奴が彼處に居ると思ひました、が脱がれ方あ
き一本道、先方は一人、此方は四名、何程の事やあらん、咎めたなら
ば斬殺しても通らんと云ふ心得にて、隠する氣色もなくツカ
とど其前迄進まん、と爲したる時、燈に透かして視廻りが此様子
を見まして、胡亂な者と心得たか、腰に付けたる呼子を口に付け
ヒユ、ヒユと吹きました、是れが合圖と見えて、城内の視廻
彼方此方より現はれ出で、ソレツ狼藉者遣るな……通がすゝと
聲を掛け、八方から墜つて蒐つたるにより、朝時も茲そ一期の大

事と心得、腰なる太刀の柄に手を掛けキラリと引抜きました、が
視廻を斬捨て、は宜しくないと、思ひ、背打にて脅さん、と脊で一
兩名、其場に打倒しました、此の働きに、恐を爲して、視廻の者、
ト怯るんで見わたる時、朝時派向いて、家來の者に、聲を掛け、朝時
如何に汝等、其葛籠を持つて、疾やく邸へ立退け、一時も早く参れ
吾は、今此所に踏止まり、後とより往かん、と家來三人、丈は漸う御
所内を遁がしました、朝時は一人、踏み止つて追ひ来る奴を防い
で居りますと、紐子の者等は、手に刺る曲者を思ひ、まして、此事を
詰所に注進いたしました、此鎌倉の城内、視廻と云ふものは、其時
分諸侯の月持になつて居り、まして、當月は、何人、當月は、何人、と月
々番がござい、ます、當月の番は、諸士の別當、和田左衛門尉、義盛で
あり、まして、三男、朝夷三郎、義秀が、其代理を勤めて居ります所
へ、斯くと注進致しました、により、三郎直ちに、得物を把つて、詰所

朝 夷 三 郎

より躍り出で御外廓御太鼓御門の此方へ来て見ると覆面した
る侍士が多勢を敵手に立合ひ居る様子、義秀方々退かれよ亂
暴者は拙者が召捕らんと組子を左右に押退け持たる柵を振
し物を言はせ撃つて蒐る、朝時心得たりと立向ひました朝
夷三郎義秀は大剛の勇士、義秀、エイヤ、と一聲叫ぶと共に敵手
の持つたる刃を其場に落し、南無三と脇差を抜かんと焦躍る
奴を「ヒューン」と横打りに其の腰を拂ひましたから堪りません
朝時は「ウン」と其場に轉びましたのを起しもやらす小脇に引
抱へ詰所へ「パイ」と飛んで往つて了ひました宛然赤子を扱ふや
うな鹽梅でございます、斯て義秀は静に己れの席に着き、朝時を
面前に引据ゑ、義秀、何者ぢや深夜に及んで御所を徘徊し、視
に抵抗を爲す不届千萬なる奴、何用あつて御所内を往返致すか
開も汝は如何ある者か姓名を言へ……と頻りに訊ねましたか

朝 夷 三 郎

朝時は唯々黙して居ります故、義秀焦燥くや思ひけむ朝時が
彼つて居ります覆面頭巾を取除けて見ますと豈に圖らん録
倉の執權北條相模守義時の次男相模次郎朝時でございませ
ら三郎屹驚致して、義秀「ヤッ是れは誰人と思ひしに朝時殿に
てありけるか、貴公ども心得ず甚だ失禮を致したり、如何なれば
貴殿には斯る怪しき扮装を爲し御所内を徘徊され且つ視廻に
抵抗を致されしぞ、是れには何ぞ事由あらん、具さに談り下さ
れいざ承らむ」と聲を潜めて問ひました、其時朝時面目無げに首
を掻げ、朝時「次郎誠面目次第もござらぬ、今更貴殿に面を向
くべきやうもあけれど斯く勝どありたる上は今は何をか包み
申すべき、拙者深く奥女中松嶋の局に懸想致し、屢々玉章を通は
す、雖も我が言ふ所を肯かず然りながら男子の思ひ込んだる
事、故是非此懸を晴らさんと終に懸の奴隷と成り果て、今宵家來

を従へ御所内に忍び入り、松嶋の局を盗み出して今や邸に戻ら
んと致せし折、視過の者に見咎められたれば之を道がれむと、拙
を抜きて脅し、漸くに局は其儘連れさせて道がしましたれど、拙
者は御身の爲めに斯く捕はれたり、既早隠蔽を致しても詮なき
事、斯く白状致せし上は罪は此朝時にあり、いで拙者を問注所に
差出し、至當の御處刑願ひたい。義秀之れを聽いて大きに驚さま
した、現在己れの妻と定めやうと致す女を連れて往きましたの
で、げすから吾々どもならざるも勘辨致しませぬ、此奴怪しから
ぬ、奴だ、密夫まで致さんとするか、其分では差許さぬ、之を嚴重
にやらかします、何が怖ろしいと云つて色の道恨と食物の遺恨
程怖ろしいものはない、と云ひます、が三郎義秀は然なる小心
の者ではございませぬ、義秀然様か、然らば義秀又、ぬるが貴
殿、然迄に局を想はれて之を連れて逃げさつしやる程なるによ

り固より松島と密通を致して居られたであらうが、朝時其
御疑念はさるゝとあがら、斷乎不義は仕らぬ、義秀、フーム其密
通を致さぬとあらば、今宵の事は義秀御見道を致さう

第六回

朝時、御見道下さるとナ、義秀如何にも御身は執權北條義
時殿の次男、北條殿は常將軍軍實朝卿との御縁合にて叔父甥に當
らせらる、斯くの如き御縁引きたる尊公が斯る不都合なる舉動
若し之を表沙汰に致す時は將軍の御威光にも關はるべし、然り
あがら御身尙局に念を残さるゝとあらば御助け申す譯には相
成らねど、既早松島の局を斷念致さるゝと、そのみとなれば、夜
の明けざる内に松島の局を御所裏方に内密にて速く御戻し、あ
れ、組子の者には夫々口止め致し、必其人に談らせまじ、如何
で御座る局を念ひ斷り御所内に御戻しあるか、朝時殿返答承り
たいサア

さうぢやと言はれて朝時ア、忝けなし、戀の奴隷どかり果てし
も彼の松島故、今は戀の夢も酔め果てたり、おきて心の残るゝと
や候はん、夜明けぬ内に松嶋は御所裏方に戻すべし、何卒拙者を
御見遣がし下さるやう……… 義秀如何にも御身の一言承知致
した、人目に懸つては相成らぬ、早や疾く。と促され、朝時毒蛇
の口を道がれし心地して、人に面を見られぬやう其儘覆面頭巾
を致して此處を遁げ去りました、後に三郎組子呼び寄せ義秀
只今召捕つたる者を其方違何者なるか心得て居るか。と尋ねま
する。と組子の者然様で御座います、組頭の室へお連れおされし
故吾々共一向面体を見せせんから何者にてありしか心得ませ
ん 義秀ア、然様か、知らんければそれで宜いのぢやが仔細あ
つて彼を助け遣はしたから必き之を人に語るな、今宵の事は是
れ切りに致して呉れるやうに……… 大きに今宵は骨折であつた

と口止め三兩程の金子を組子一同の者に遣はしまして、ア
是れにて無事に治まつた。と考へて居りました、所が無事に治ま
る。と朝時の部屋に押込められて泣くに涙も出でせ喚ぶに聲も
局は唯進退谷つて如何になり往く事なるかと思ひ亂れて居り
おく。唯進退谷つて如何になり往く事なるかと思ひ亂れて居り
ます所へ遅れて立歸つたる次郎朝時松島の局の繩を解き朝時
や、和女へは誠に申譯もなし、一旦の過は何處までも謝しまする
拙者も今は夢の醒めたるが如き心地致す、是より和女は御所裏
方に、お戻し申すべければ御安心あれよ。と詫びもし慰めも致し
たので、局も大きに喜び、朝時も是れより御所に戻さうと思つて
居ります。すが、夜が明けて了ひました、夜明になつてはモウ
仕様が御座いませぬ、表向に局を連れて往つて御所裏方に参り
へエ御免下せエ昨晚私の方に必要を品で御座いましたから連

朝 夷 三 郎

れて参りましたが今朝に相成つて大きに不用で御座いますか
らお戻し申しに参りました、どうか御受取を願ひます、疵者には
致しません念の爲めに御改を願ひます……其様もと言つた
つて先方で受取るものでは御座いません、と云ふて之を返さ
ば朝夷義秀に濟ませ、何としたら宜からうかと道の次郎朝時も
途方に暮れて居りました御所内では上を下への混雑昨宵の内
に松島の局を連れ出した奴がある、と云ふので召使賤機の繩を
解き猿轡を解いて段々様子を聞く、賤機「何者とも知れぬ真
黒紛装の侍士三四人參つて理不盡に妾を搦め猿轡を掛けて柱
に斯く括し附け、お局様を頭連れて往きました。と云ふ、それは
容易からぬ事共、直様其趣を、お表に沙汰致しましたから乃
でお表より鎌倉の四方へ手分を致して詮議嚴重にかりました
すると朝夷三郎義秀に口止めをされた組子一同が心算を始め

朝 夷 三 郎

ました、二三人打集ひまして、甲「どうだい同役昨宵助けた奴は
彼は何者だらう、乙「何者たか分らん、甲「彼奴だぜ局を盗ん
で途電をした奴は……乙「さうだ義秀殿が彼を召捕られてど
う云ふ譯で助けられたものだから分らない、けれども御詮議が嚴
しくなつて來るてエ、何途露顯をせせには居るまい、さうなる
と吾々共が口止をされて之を助けたと云ふては役目に係はる
から何でも是れは表沙汰に申上げた方が潔白で宜からう、と己
れの身の怖さに訴へ出でましたのが執權北條義時の許で御座
います、甲「借御訴を仕ります、昨夜吾々御所内視廻方勤め居
りました、所々様々々斯う、云々で義秀殿之を搦らめ上ら
れましたが、其者を御助けに相成りまして吾々共に口止を爲さ
れ、ました、然るに今朝承りますには何者か御所内のお局を盗み
出せし亂暴者、是あり候どの取沙汰、若し此事他より漏れまして

吾々其の役目の落度と相成りましてはありませぬ、因つて此儀を御訴へ仕ります、何卒他より斯る事の漏れましても吾々其の落度にならざるやうの御取計らい偏へに願上げますと申出でますと相模守義時人に喜びました、と申すのは此義時と和田左衛門尉義盛とは軋轢を致して居まして、何か事あらば義盛を蹴擠して呉れやうと思ふけれども和田に落度が御座いませんに由つて只管落度を見出さんとして居りました所、恰好朝夷三郎義秀が召捕つたる者を助け組子に口止を致したとの注進で御座るから、儲は此局を盗み出せし奴は三浦九十餘輩の縁者の奴に違ひない、うれ故に義秀が之を内聞に済ましたのであらうから別當義盛を喚び出して朝夷三郎義秀の吟味をさせ、義秀の口から本人を自白させて本人は斬首、義秀は切腹、義盛は役目御免、好いふとが耳に這入つたりと片類に笑を含み、義時「ヤア能

第七回

くそ注進致したり、必ず其方等の落度には致すまじ、然りながら必要の時には證人に相成るべしと吩咐けい、問注所に罷り出で、病氣にて引籠り中ある和田左衛門尉義盛を喚び出し、是から朝夷三郎義秀を訊問致させるといふ問注所吟味の條で御座います

諸北條義時は問注所へ出仕致し、和田左衛門尉義盛の許へ推して出仕致すべき旨申入れましたるにより、義盛も何事なるかと思ひました、が鎌倉の大事と云ふに捨ても措かれず、病氣を推して即時問注所に罷り出でました、見ますと最早や將軍も御出席諸役人もズラリと列座居ります、様子、義盛其席に進みます、ると北條義時、御別當御病中を推して御出仕を願ひましたるは、餘の儀に候は、昨夜御所内へ亂暴者忍び入り、奥局松島と云ふ

女を盗み出して逐電致したり、然る所城内視廻方朝夷三郎義秀御所内へ胡亂の曲者往來を致すと聞いて出合ひ其四人の中三人は捕逃がせしも一人を捕つて抑へ詰所に引連れたるが如何なる仔細か之を助けて放ち遣はし組子に金子を與へ口止致せし由訴出でし者あつて拙者悉く之を存じ居る、察するに其の曲者みろ局を盗み出せし者の一人と覺はたり、然るを義秀其面体を見るより之れを助けて放ち遣はし組子へ口止を致せし杯甚だ以て後暗き致方、然れば三郎義秀を此方にて吟味致すも易けれど、御自分は諸士の別當職をも勤めらるゝ御方故吾々輩より義秀を糺ぶるゝと聊か筋違の嫌ひあり、然れば御自分朝夷三郎義秀を疾く此場に喚び出し潔白の御吟味あらざ欲し、手前私かに察するに、義秀其曲者の面体を見て助け遣はせしとあるから、三浦一族縁者の仕業なるべしと存ず、如何で御座る和田殿、速

かに義秀を御吟味爲されよ。と始めて聽いて和田義盛屹驚仰天義盛ハ、ア………輕忽ならざる事に御座います、委細承知仕りて候、仰せの如く今日此場へ三郎を呼び出し潔白の吟味を仕らん。と自分の席に着きまして、直ぐに朝夷三郎義秀の方へ沙汰を致し、まずと義秀は一族土屋大學義清が附添ひまして問注所に來り遙か下がつて両手を支へ平伏致して居ります、和田義盛テロリと瞰下し、義盛三郎面を上げい、今日汝を此場に呼び出せしは餘の儀にあらせ、其方昨夜城内視廻方相勤め候折御所を往來爲す胡亂の者を召捕り、再び之を助けて組子に口止め致せしと聞く、尤其夜御所裏方に忍び入り局を盗み出せし者有之との事にて、今御執權の御疑念には其方曲者の面体を見て助け遣はせし疑念、何故あつて其方一旦搦めし者を私に助け遣はし組子に口

止杯は致せしぞ、昨夜召捕つたる者は何れの何者にて姓名は何
といふか、サア此場に於いて眞直に申立てよ、若し汝明白に言は
ざるに於ては骨を挫いても言はず、此義盛は長年諸士の別
當職を勤績爲し、今日に至るまで役目に私を狹みし覺い無し、然
るに汝今後暗き仕業を爲し一族一統の恥辱を惹き出さんぞ、
る不届な奴、有餘に白状致せ、どうぢや……と嵩に懸つて訊問致
す様正直面に現れて誠に潔白なる御方で御座います、此時義秀
恐る怖る首を擡げ、義秀御訊ねに由り御答を仕りませ、成程昨
夜私城内視廻方を相勤め詰所に罷在候處、組子の者の注進に胡
亂の曲者三四名御所内を往來致し候に、より之を咎めし所其中
の首領立ちしもの長刀を振つて吾々に抵抗を爲しナカ、手
剛き奴にてアハヤ捕逃さん様子に候へば、疾々御出張下された
しこの事、ふは捨て置き難しと拙者罷出でしに、其三人は既に捕

透がせし後なれば、残る一人を捕め上げて詰所に連れ参り事の
仔細を尋ねしに、いとも瑣々ある次第にて、君公へ御敵對を致す
者ならず、又叛逆人と云ふべき者にもあらぬ、唯だ婦女子の色香
に迷ひて斯かる所業に及びたる事、判然致せしにより、差て殿重
の處刑加ふるまでも無かるべしと存じ、能く其者に意見な
差加へ、夜明けぬ内に松島を御所裏方に戻すべし、組子の者には
口外せざる様取計らはんと如何にも其奴を助け遣はしたるに
相違御座いせん、其奴も亦た必き局を戻さんと約束を爲し、其
座を引去りて候が約の如く御所内に松島を戻さ、りし所より、
三郎今日斯る御訊問を蒙る次第、是れ其奴の心を見損じたる義
秀生涯の失策にて、今更詮様も無之候へども、昨夜一旦助けしを
今朝に相成り如何程御吟味嚴重に相成れば、とて手前口より其
本人の姓名は申し難し、若し此場に於いて其本人の姓名を明か

さん程からば何條昨夜之を助け遣はさむ、何卒天下の御威勢を
以つて草を分けても本人の御捜索之れあるやう願ひ度く、右本
人罷り出で、御處刑に就き、義秀御順道の御處刑仰せ付けられ
ますとも固より君公を御恨みには存じ奉らぬ、且つ其本人の名
前を明々地に申上ぐる時は將軍の御外形にも拘はる儀、義秀斷
じて其姓名は申上兼ねまを、と斷乎と言ひ切りましたる勇士の
一言金銀の如くであります

第八回

されども義盛は我忤の事でありませうから、オ、さうか。と言つて
捨て、は置かれませぬ、飽まで嚴重にしおければおろませぬか
ら、義盛、オ、何と言ふても言はぬとならば言はせるやうに致
すべし、三郎を拷問に掛けイ……と云ふ言葉を聴いて大江因幡
守廣元進み出で、廣元「アイヤ御別當暫らく御待候へ、朝夷三郎

義秀を拷問どの仰せ無益の事に存じ候、唯今此席にて承るに義
秀の返答は適れ大丈夫の言で御座る、彼自ら申出づるものと相叶
はぬに因り天下の御威光を以つて捜索を願ふどの事なれば是
等の事必ず朝夷義秀に問はずとも外に詮議の道あらん、殊に義
秀は其本人と云ふにあらぬ、其奴の言葉を信じ仁心を加へて助
け遣はしたる迄のこと、然れば朝夷義秀を拷問に掛ける必要は
之れ無かるべし、上の御威光を以つて探索致さば本人を探がし
出さむこと瞬く内、其本人の出でし後、義秀の身分兎も角も計ら
ふべし、先づ夫迄は義秀を一族へ預げ置いて然るべきかと此廣
元は存るなり、方々此論を如何に……と申されました、此一言
を聴いて一同言葉を揃へ、廣元公の御一言御尤千萬にて候、と云
ふので茲で朝夷三郎義秀は一族土屋大學義清に預けられて問
注所を退がりました、和田義盛も其時に始めてホツと息を吐き

ました、決して自分の伴を拷問に掛けたくはないが潔白を現はす爲めに辛らい事ではあれど已むことを得ず斯くと言ひ出し
ました所、大江廣元の一言に虎口を遁れし心地にて退出致し
義盛、ア、廣元殿が慈悲の一言誠に喜ばしい、オ、エ(大江)に有り
難てエ阿、爺さんだと言つたさうでござすがナカク、其様な洒落
所ではございせんでしたらう、諸此評議を聴いて居りました
る北條義時の惣領式部丞泰時、是人は又父親と違つて誠に鎌倉
の大賢人でございます、川柳に
安い時儲けて高い時に賣り
と云ふのがございます、北條は此泰時の時に治定つて九代の
高時で滅びました、川柳は誠に面白事が口軽く出ます、
ので……、贅言は措きまして泰時は北條九代の中第一の賢人、此
ケンタンと申します、牛蒡を油で煉めたのは違ひます、う

れはケンタンで……、又贅言が出ましたが、先づ泰時であるのさ
ては小松内府重盛であるのと言つたら此日本にも數へる程し
かござりません、是れと菅原の道實、此れがマア日本の三賢人だ
といふ人もあるさうでございます、諸泰時も其席に居りまして
和田義盛の訊問を聴いて居ります、と義盛の訊問も潔白おれば
朝夷義秀の言葉も遠れ大丈夫の返答、義心が何處迄も徹つて居
りますから、只管和田親子の胸中を感じて居ります、と義秀の言
葉の末に其本人の姓名を申立てると將軍の御外形に係はると
云ふ一言がございます、之を聴いて、ハテナ我御父上は三浦九十
餘輩の者の仕業あらんと思召して居る、然るに三浦の一族が局
を盗み出したりとて將軍の御耻辱に於る次第では、はい君公の
御身に係ると云へば、其御縁でも引いて居る者で無くてはなら
ぬ、其御縁を引いたのは我北條の一族であるが、して見ると我一

家の者より然様なる亂暴者が出てたるか、果して然らば和田へ
對して誠に申譯なく鎌倉の諸役人に對しても面も向けられぬ
次第、嗚呼心懸りの事を聞くものぢや。と思ひますと、どうも其席
に落着いて居られませんか。腹痛を名に致して一足先きに下
城を致し、自分の部屋に戻りまして熱々勤者をして居りました
が、泰時「オ、心に當りましたのは弟の朝時のみとござい
ます。彼が舉動當節ソハハ致し居るは若しや……と思ひ付き
ましたから從者を喚び、泰時「〇時を喚べ……從者「ハッ……。
直くと次郎朝時の方に参り兄上の御召と云ふ沙汰を致しまし
た。所が朝時は局を盗んだは盗んだが朝夷義秀に捕つて意見を
され、夢が醒めた様な心持になり、御所にお局を還さうと思つて
居る内に夜が明けて了つて還すふどが出来なかつたから、ど
うしたら宜からうと野郎眞青になつて顛倒つて考へて居る宛

第九回

然ラムチの堀を見た様な塩梅でございます……所へ兄上より
の御召と云ふて人が参りました。奴親父より阿兄の方がどうも
嬉しくつてならぬが、喚びに來たから往かぬ譯にもいかんので
餘儀なく其の部屋に参り兩手を支へて、朝時「兄上御用にござ
りまするか
泰時「ア、朝時、其方を此處に呼んだのは他でもないが、今日其方
は問注所に出仕致さぬによつて御所の異變を存じ居るまい、然
れば余より申聞かざるが、昨夜何者かは知らず御所裏方に忍び
入り、松島の局を盗み出し、御所内を逐電致した折、朝夷三郎義秀
其一人を召捕りしが思ふ仔細ありてか、其者を助けて放ち遣は
し、組子の者に必死言ふおど口止を致したのぢや、然るに其局を
盗んだる奴が局を御所に還へずべしと約束をして其處を助か

りあがら遂ひに其約束に背いて局を還へささりし所より此事
表沙汰にあり組子の者より我父上に訴へ出でし處御父上には
日來和田とは確執の間なれば是れ必ず三浦一族の仕業ならん
どの御疑念にて病中の和田義盛を推して登城せしめ問注所に
朝夷三郎を喚び出させて吟味を遂げしが和田の一言は斯様斯
様朝夷の答は斯うく一旦助けし者おれば己れの口よりは如
何様の事ありとも言はぬと云ふ誠心に富んだる志武士は
總て斯くありたきもの其一言に拙者深く感心致したが唯だ心
に懸る節は義秀殿の言葉の末に其本人の姓名を云ふ時には當
將軍の御外形に相係はるどの一言我が父上には和田義盛一族
の仕業ならむとの思召しあるが此泰時は然様心得ぬ三浦の一
族局を盗み出せばとて強ち上の御外形を引出すとは申し難し
却つて我北條一家もろ當將軍家との御縁もあれば然様に言は

る、道理あり、若し我一族より然様の亂暴者出づる時は和田に
對して面目おし、汝にてはあるまじきが一族の中を能く詮
議を致し然様の者ありたらんには至急召出して其害を拂はせ
ばならぬ、依つて此議を申聞かせんが爲め汝を此處へ喚び寄せ
たのじや、確かと探索致せ、宜いか朝夷、朝夷ハッ……兄上に
お尋ね申しまするがそれより朝夷義秀の身に於いては如何相
成りまして御座りますか、泰時然ればあり、義盛潔白を表はさ
んが爲め拷問とまで言ひ出でたるを大江廣元殿の一言にて一
族土屋義清に預けとまつて退がるを見て吾は下城を致したが
朝夷「エッ……スワー大事ありと蓋乎起ち上かつたる朝夷の裳
裾を捉らへて、泰時待てッ、血相變へて何處へ行く、偕は昨夜の
狼籍者は朝夷汝の仕業にてあつたるか、と星を指されて朝夷「面
目次第も御座らぬ、と両手を支いて平身低頭するを泰時見るよ

り髪逆立ち目皆裂け左の手を伸して朝時が襟首を緊乎と掴
み手元へッリッリと引付けまして右手に持つたる中啓を揚
び〇ッリッリと丁々發矢と打叩き 泰時「ハッア、情なき奴かな誰
らう執權職北條義時の次男と生れて斯様なる不仕駄落を仕出
來すととは……父上には汝の心を御存知なく正に和田義盛一族
の仕業からむとの御疑念より病中の義盛に登城を促し朝夷義
秀を訊問せしめしに汝もろ其本人ありと知る時は三浦の一
族和田義盛を初めとして鎌倉の諸役人へ面を向くべき様も
し、父に取辱を興へ將軍の御外形を惹き出し、一族の恥をも思は
ざる不届者不忠とや謂はん不孝とや謂はん、憎んでも尙餘り
りと又も發矢々々々と毆たれしが我身の上にも過あれば朝時唯
手を支へ阿兄の折檻を受けて居りましたが少時ありて泰時個
みし拳をバラッリと放し 泰時「ヤ、如何程汝を折檻致すとも和

田殿の怒りは能き難し、切めては義盛殿の憤りを解かむ爲め汝
是れより問注所に罷越し、具さに和田殿に訴へ出で殿重なる御
處刑を願ふべし、御縁に依り事を軽くおさむ杯夢々思ふ可から
ず、尼公政子様へ請ふふと杯あらんには此兄泰時か其分には差
措がぬぞ、今若し三浦の一族怒つて事を起す時は天下の大亂と
もあるべし、屹度申付けたるぞ朝時……疾や往け。阿兄の一言
骨肉に徹し 朝時心得候。朝時支度を致して立上がり是れよ
り問注所に罷越し竹の間に扣へ和田義盛の退がり待つて自
首を爲し、茲で義盛が再び將軍御前へ罷出で朝夷三郎義秀を喚
び出して突合せ、二度の訊問と云ふ條次回に申上げます

第十回

次郎朝時は兄式部丞泰時の言ふが儘に邸を出て問注所に罷越
し 朝時和田殿御退りありしや。と尋ねましたる處未だ退らぬ

朝 夷 三 郎

と云ふから雲時此方の席に扣へて居りますと間もさく義盛始
め録倉の諸士問注所より下がつて参りましたから朝時茲ぞと
一間を出で廊下に兩手を支へ 朝時別當暫らくお扣を願
上げ奉る一言申上なき事之あり候と引止められて義盛ア朝時
殿にて候か何等の御用事にて…… 朝時されば別儀には候は
せ昨夜局松島を盗み出しましたる本人は恥しおがら斯く申す
朝時にて朝夷殿には一點の罪も候はせ何卒義秀殿は其儘に御
宥免下され此朝時に繩打つて御曳立を願ひます實は拙者局松
島に悪想致し遂ひに悪の奴隷と成果て昨夜其の部屋に忍び入
つて局を盗み出し邸へ戻らんと思ひしに城内視廻朝夷義秀殿
の捕ふる所とありしも三郎殿の情にて一旦見遣されて候がろ
れが爲め却つて義秀殿御咎めを蒙り土屋義清へ預けられし由
然るに本人たる拙者之れを黙視致しては誠に以つて義理立た

朝 夷 三 郎

す因つて御訴への爲め斯く罷り出て候速に朝時へ御順當の御
處刑仰せ付けられ下さらば有難き仕合に存じますと有りし儘
を訴へ出でましたと義盛はよもや朝時などの仕業ではあ
るまいと思ふて居りましたから大きに驚きました元來慈悲
深く斯う訴へて出られると誠に氣の毒になる性質で御座いま
すから能くぞ訴へ出でられた義盛悪しき様には計らふまじ暫
時此場に御扣はあれと言ひ置いて再び注所に出て見ますと
未だ將軍實朝卿を始めとして執權北條義時も其席に着座致し
て居りましたから 義盛義盛願上げます 實朝卿何事なるかと
云ふ御尋ねで御座います 義盛他の儀にても候はず昨夜局を
盗み出せし本人是れに出でましたから如何なる刑に處せら
るべきや義盛先づ之を承りたう存じ升北條義時之を聞いて
義時されば和田殿うればモウ論ある迄もあるまじ局を御所内

より盗み出し視廻に抵抗を致したる容易ならざる大罪人無論
首斬つて其罪を糺して宜しう御座る 義盛御執權の仰せ御尤
に御座るが實は其本人唯今手前方へ自訴致しまして御座る如
何なる大罪人とても自訴致さば一段罪を軽く致すは天下の制
度況んや婦女子の色香に迷ひしのみにして別に是ぞと云ふ悪
業とても候はせ其上前非を悔いて自訴致し候により何卒其罪
を御宥し下されませうからば義盛誠に有難き仕合に存じ奉る
と其本人の姓名を言はずに執成しましたと北條義時心中
に「義盛が斯く罪を輕めんと言ふからには局を盗んだ奴は愈々
三浦の一族縁者に相違おし争かた此罪を軽くすべきやと斯う
思ひまして 義時「アイヤろれば御別當些と輕怒で御座らう昨
夜の中に自訴致さば其罪を輕むるも論無からんが今朝に相成
り斯く詮議厳しく身の置所無き儘に訴へ出でしは是れ自訴と

云ふも眞の自訴にあらぬ是等の事を輕忽に致す時は天下の政
道に關はるべしされば嚴重の御沙汰あるべう存すれ尙本
人のみにならず其親族輩の罪迄も嚴重に御處置あれよと馬鹿
野郎罪人は己れの倅と知らぬ大聲を揚げて怒鳴つて居ります
和田義盛も之を聽いて若い顔を致し 義盛左様でござらば其
罪を定むるゝは餘人へ御仰付けを願ひます批者の倅義秀も
其罪人の一人なれば義盛甚だ難澁仕る…… 義時「宜しい義時
代つて其罪を定むべし疾く本人を此場に御喚出し下され心得
て候と起上かつたのが三浦九十餘輩の一族古郡新左衛門尉保
忠と荏柄平太胤長の兩人今義盛と御廊下まで退がつた時に其
本人朝時を見て知つて居りますから 二人「奴を此處に引張出
して北條に赤恥を搔がせてやらうと云ふ心得にて早速朝時を
曳立て参り 二人「御執權昨夜局を盗み出したる大罪人は此者

にて候。親族輩の罪を嚴重と仰せられたはうれに相違御座るま
いふ。と言はれて義時如何にも……と言ひあがらズイと見まし
て 義時「アツ。」

第十一回

盗賊を捕へて見れば我子あり己れの次男朝時とは夢さら想寄
らぬ事御座いますから遠の執權義時もハツと傳き首を垂れ
雲時無言にて座中興醒渡つて見ねたる様子中にも心ある侍士
は好い氣味ぢやと顔と顔とを見合せてニヤ／＼笑つて居りま
す、和田義盛は氣の毒に思ふてこれも差俯いて居る雲時は問注
所の人々聞と致しました、時に北條義時漸う／＼面を擡げて
義時「恐れながら君公に言上仕ります、昨夜の本人何者なりやと
思ひしに思ひさや愚息朝時身の上をも辨へ申不法の舉動を爲
し不届至極の奴、何卒重き御咎めを仰付けられ下さりませるや

う、又其親として俸の罪を定むらも何とやら諸士への遠慮も之
あり候何卒餘人へ仰付け下さらば有難き仕合に御座ります、遠
の姦物も困り果て、將軍へ斯く言上を致すと、實朝卿可い／＼
然らば予が其罪を定めて得させう、朝時面を上げい……汝身分
をも願みざる不法の舉動をなし不届なりと雖も前に義秀の申
せし如く此實朝へ敵對を致せしと云ふにあらす唯た婦女子の
色に迷ひしのみおれば這回の所は格別の慈悲を以つて其の罪
を宥し取らせむ、向後女色を耽度慎めよ、義時邸へ連れ歸り能々
彼に意見を差加へよ、先づ今日は退がるべし。と仰せられました
斯くの如く罪を軽く御定めおされたのは是れ將軍家御慈愛の
有難き御言葉と云ふのは朝時の罪を重く定めると然程罪の重
い者を朝夷義秀が私かに助け遣はしたるは不都合なりと直ぐ
三郎の方へ懸つて参りませうから朝時は兎も角も朝夷義秀をど

うか助け遣はしたいと云ふ將軍の有難き思召でろゝで先づ此
罪を軽く致して 實朝卿既に本人朝時が斯く無罪とならば朝夷
義秀には更らに罪なし、三郎を此場に喚べい。と仰せられて義秀
再び御前へ召されました、實朝卿御覽遊ばされて 實朝卿義秀、今
に始めぬ事ながら昨夜の汝が計らひ殊に一旦助けたる上は如
何なる事ありとも我口よりは名を言はじと嚴刑身に迫るも更
らに恐れず断然として言ひ放ちたる義心金鐵の如し武士は斯
くみろありたけれ、通れなるぞ、尙其志を以つて此實朝へ忠勤を
賜み呉れよ、和田は好き子息を持ちしぞ、之を取らざる。と仰せら
れて御手づから義秀に御劔を下されました、三郎御前上首尾で
御座います、和田義盛は之を見て 義盛嗟呼有難き君公の思召
斯る御明君に渡らせらるゝに北條の爲めに威を奪はれ、將軍の
御威嚴十分に相立たざるは誠に残念なる事どもなり。と隨喜の

涙にくれたといふ事で御座います、ズイキの涙だと云つて眼か
ら芋殻が飛び出した譯では御座いますまい斯くて義盛は義秀
を連れて邸へ退り北條は朝時を連れて同じく邸へ戻りました、
善と悪との二筋途どはみんな事で御座いませう、諸士一同も亦
た片方を誇り片方を褒めつゝ取りに下城を致しました、諸
北條邸へ歸つて参りますと、憤つたの憤らぬのど云つて忿々
と怒りを現はし 義時次郎、是れに出ろ……コレツ、其方も執權
北條義時の次男と生れ居つて如何程女に惚れたりどて局の部
屋に密みに這入るとは甚だしい如何故其松島が欲しいと思は
ゞ此父に對つて彼女を吾妻に娶りたいと申さぬ、さすれば余執
權の威光を以つて又十分に取計方もあらうものを、女を盗みに
入り朝夷の爲めに勝どあり、又訴へる所もあらうに別當義盛の
許に訴へ出て此父に恥辱を興へる、汝の様なる大馬鹿者を見た

事がふい不届な奴だ愚味な奴だ愚味も愚味もハカリ愚迷(ハカリ
リ慈姑)大愚鈍……愚鈍も銅焼グドン位ふ者だ汝は仕様のふい
奴だ以來は貶度女色を慎め大馬鹿野郎め……朝時恐れふが
らお父上唯今の御言葉に和田義盛方へ訴へ出でしは筋違と仰
せられました其御言葉は些と手前には解せません 義時ナ
ニ何か解せん 朝時然様で御座います……這回の事私身か
ら出し錆にて一族一統の恥辱を惹起しましたる段は實以つて
相濟まぬ事重々御詫を致しまするが朝夷が情を以つて手前を
助け呉れし爲め却つて御咎めを被り彼自ら其罪人の一人とせ
られしを其儘打棄て置きては三浦九十餘輩の人々に濟まき又
天下の大難を引出す事もやあらんかと存じ切めては三浦九十
餘輩の人々の怒りを和げ事穩便に致さむが爲め能と和田義盛
に自訴致したるにて候されば汝の身持放埒は不届ふりと雖も

第十一回

和田方に自診致したるは神妙なりと仰せ無うては叶はぬ所然
るを義盛方に訴出でたるは筋違なりと仰せらるゝ御言葉は近
頃其意を得ざる事と心得ます
義盛は益々憤りまして此馬鹿野郎汝は親を難詰て何得か往
くと思ふか、うれだから手前は大馬鹿者ぢやと申すのぢや、縦令
汝が和田方に自訴致しても故なく其罪を宥されるものでない
現在將軍實朝卿は御縁に取れば我が親だ吾は實朝卿が叔父に
當る、されば其威光に依つて汝の罪が此くの如く軽く無罪と云
ふふどになつたのぢや、是れ全く親の光だ其親を有難いと思
はずに難詰たり坏して何程得が往く手前の様な大馬鹿者を見
た事がない、無罪とあつたは親の光だ親を忝けむいと思ひ居れ
ッ……と云ふと此方に聴いて居りましたる式部丞泰時進み出

て 泰時「御父上其御言葉は少々相違致しませうぞ……義時ふ
れに又驚きまして 義時己れの伴は皆小理屈ばかり様やアが
つて仕様がな、昔者と今時の野郎とはどうも違ふ……と、咳い
て居ると 泰時「一体殿君の御職務は鎌倉の御執権職では御座
らぬか、上一人貪戻なるときは一國亂を生、ぞか申します、今執
権職たる殿君の伴が斯る不法を働いたるを我君格別の思召を
以つて之を無罪にかし下されたるは忝ない御恩惠、然るに之を
親の光ぢや親を有難いと思へど仰せられて其儘に御濟しなさ
る、思召で御座りまするか、それにては御役目に關はりませう
執権の伴が斯る不法を致して無罪に相濟む時は他に斯様を暴
人之れ有りたる時に執権の伴が無罪とありたれば吾々輩は無
論の事と其罪を苟且に致さば天下の政治は如何で御座らう、將
軍よりは忝けなき思召にて相宥され候とも執権の職務が立た

ぬと何故朝時の首斬つて上に御差違には相成らぬ、然か致して
役目の面を正し、潔白を御示しなさらすは天下の政道は立ちま
すまい、親の光ぢや親を有難いと思へど仰せ近頃其意を得ざ
るもいと存じ候、若し和田義盛が什麼に北條吾方より罪を軽く
と申立てし時は之を拒んで重く死刑杯申せしに我伴と見て大
きに驚き將軍より無罪と仰せありしを幸ひに其伴を連れ戻
と云ふは、父上此御返事何と遊ばさる、と申し來らば何と申披を爲
さる、父上此御返事何と遊ばさる、と申し來らば何と申披を爲
共、殿父には此事件に就いて執権を辞し御隠居爲さる、思召に
や、サ此職をば御勤遊ばさる、思召ならば家の恥辱には替へ
られませまい、其職務には替へられませまい、伴一人の生命何の
物かは、サ速に朝時を斬つて潔白を天下の人に御示しなされ、泰
時悪しいふとは御勘め申上げぬ……朝時汝も覺悟を爲い朝時

兄上の仰ふせある所重々御尤イザる父上速に不肖を御手討に
遊ばされよ最早や手前覺悟を致して罷在る御猶豫あらば是非
に及ばぬ手前此場にて割腹致すべし。と短刀を執直さうとする
其手を捉らへて北條義時待てくくろんを燥急た事を致
すな其方共は仕様のない奴だ馬鹿で好色で言葉遣が荒くつて
手前の様を奴を見た事がない何も死ぬにやア及ばぬぢやない
か將軍より仰せ出されて斯く罪となつたものを好んで腹を
切るには及ばぬマア待て……泰時汝の申す所重々尤ぢや
けれど斯く命の助かつたものを殺したくはあいか。式部丞之を聽き
助けて吾耻辱にならざる計らひはあるまいか。式部丞之を聽き
まして 泰時お父上然程迄に此奴が不憫に御座いまするか
義時其方の前ぢやア言ひ悪いがナ、モウ侍の中ぢやア此野郎が
一番可愛いツイ……式部丞呆て返つたが 泰時は是非に及びま

せぬ然様おればみれば御勘當を爲されたが宜しう御座りませ
う執權の職務が立たぬと仰せられて御勘當が…… 義時然様
かろれなら生命に別状がないからさう云ふ事に致さう……然
らば朝時改めて勘當を致すと言渡しましたか勘當とは表向内
密は己の故國へ送りましたなれども執權の職務が立たぬとあ
つて勘當の届を致しましたから和田義盛嗟呼泰時は適れちり
父を諫めて借は朝時の勘當出来したぞさりながら折がなあら
ば御勘當をもさうか詫をして遣はさむと思つて居りました借
て朝夷義秀と松島の局とは素より將軍の仰出されし事とて縁
談愈々整ふやうになりましたるを北條之を拒んで鎌倉の尼御
臺政子の御方に調言を構へ政子様が遂に此縁談を破談させ朝
夷義秀と松島の仲と絶たんと致し是れが爲めに松島十八歳を
一期として自殺を致し義秀に標を立てる一件から和田黨の一

人和田平太甚柄胤長を討たんと云ふ大義を企てますの件となる、次回に言上仕ります

第十三回

執權北條義時が實朝卿の叔父と申しまするは己れの姉の政子様御腹から實朝卿が御出生遊ばされたので即ち右幕下頼朝公の御胤で御座います、此政子様は北條遠江守時政の惣領娘で御座います、が頼朝公の御父義朝卿が待賢門の夜戦に敗北致し遂に尾州の野間に於て長田忠致が爲めに御最後をなされ、た其節に佐殿も亦た平家の彌平兵衛宗清の手に擒へられ、た作阿呆、詐馬鹿をつかつてお在でなさいました、が清盛が之を殺さうと致しました時に小松内府重盛公それに清盛の繼母池の禰尼の御兩所の命乞で危難を助りまして伊豆の國姪ヶ小島に流罪となり、配處の月を御覽なされて、御座いました、時に伊

豆に伊東の莊司伊東入道祐親と云ふ人が御座いました、ふれは即ち河津三郎祐泰の父で彼有名なる曾我兄弟にはお祖父さんに當るんで御座います、又祐泰の弟に伊東九郎祐清と申すのが御座いました、倍此の伊東次郎祐親入道が佐殿を御傷はしく思ひまする所からうれば、懇ろに御介抱を申上げて居りました、た、所が次郎祐親が上京を致して不在の折に祐親の娘と何時しか削りあき交情になりました、遂に娘は佐殿の御胤を孕し産み落したるが男子、兵衛佐もあか、剛膽ある方で平家繁榮の世の中に於いて此の子様に源氏丸といふ名を附けまし、後次郎祐親が歸國を致しました時に乳母が其の子を連れて出ました、が祐親は己れの娘の腹より出生を致し佐殿の御胤である、云ふ事を聞いて若し此事平家に聞えなば二心を抱く者と言はるべし、家の破滅には替へられぬと云ふので其お子様を瀧に沈め

佐殿を討ち奉れど表向恐ろしい勢を現はしたが内密は作の九郎祐清に助けよと云ふ内命を下したのじやさうで御座いますうこで九郎祐清が頼朝の危難を御助け申上げて此處に居つてはならぬ速く御遣れおされと云ふので兵衛佐主從五人別に指して往く所とて御座いませぬから北條四郎時政の邸へ逃げ込みました、たすると四郎時政と云ふ人はイヤあか、先きの見えた人で此御方は絶へて久しき笹龍膽の紋付いたる白旗を翻す御方と眼星を付けて己れの家にお隠庇ひ申上げお客お客と云ふて主從五人の食客、豪らいもので御座いますお昔の大名は上膳、搦膳で美味い物を食べさせて食客に置きました講談師の家には主從五人の食客杯あわらうものなら食客の爲めに主人食はずに餓死んで了ひます、尤も講談師と大名とは一緒にばかりませぬ、借北條が誠に懇ろに御扱申上げて居りますので先づ兵

衛佐が御身は大きに安泰にらせられました、すると四郎時政の娘に姉を政子妹を時子と申す二人が御座いまして姉政子は餘り美しい女でも御座いませぬが妹の時子が頗る別嬪で實に見ぬ唐の楊貴妃かども想はる、ばかり姉さんの方が嫵母の醜と云ふんで、どう云ふ譯だか極くの醜婦で御在で、おさる誰れも手の附け人が無い宛然鍛冶敷を固めた様を顔色をしてお在なざる頼朝公お名前前からしてヌケ殿で御座いますから早くも妹の時子に目を注げました、頼朝當家の妹娘時子は誠に別嬪だお在で、お彼女を我手に入れたいものだと、窃かに心を通はせて文をお認めに相成りましたが、お思ひの丈を認めてと云ふので是からお往昔の色事は皆艶書と云ふふとを致しました、が今では餘り御座いませぬ、明治人種には艶書の色事杯と云ふ事はないこと

で、艶書杯を致すよりも先方の一ツ挑懸る方が速い十人口説いで一人言ふふとを肯けば一割外れても五分々々で元とく杯と云ふ甚だしい奴が御座います其頃の人間は一旦文を通はせませず、頼朝も文を書きましたが自分の書いた文を自分で持つて往くと云ふのも誠に器量の悪い話ぢやから誰か好い傳手を求めて取次をさせたいうれには誰が好からうぞと考へられました己の家來に頼朝源五と云ふ忠義の者が居ります之れに申し附けんと窃かに源五を喚んで 頼朝源五汝に一大事の密事を申し附けるが骨折つて勤めよ 源五ハッ御家來多き其中に密事を拙者へ御告げ下さるとは誠に身に取れまし有難き仕合如何なる事にて候か源五身命を抛つて勤め奉りませ、何卒疾く其儀を仰付け下さらば有難き仕合に存んじ奉る頼朝ウフン……さう何も堅くるしい事でも無いがナ、其方さう

四角張つて正面を向いて居ると、さうも申し悪くい様を氣が致す、其方後方を向け…… 源五「へエ…… 頼朝其方此方を向いて居ては可かん後方を向け…… 源五「後方を…… へイ宜しう御座ります、此通り斯う後方を向きましたのが正可裏門の御用では御座います、何で御座います…… 頼朝「それでは其方に申すがナ、當家の娘時子は誠に美婦ぢやナ 源五「へエ、左様でござるか、頼朝「其時子の許へナ 源五「へエ 頼朝此文を取次いで返事を買らうて來ては給るまいか、さうぢや……之を聴いたる頼朝源五此方を振り向き様頼朝を確乎と睨め付け 源五「御前…… 頼朝「何だ大きな聲をして…… 源五「貴所はナ、何で伊豆の伊東の家を逐出されました、伊東祐親が貴所を親切に隠庇て色々世話をして呉れた其恩を仇にして祐親の娘を唆かしたのが爲めではありませんか、祐清の情に依つて幸ひに御通れな

され當邸へ逃げ込み斯くの如く隠庇ふて呉るゝ故ヤレ安心と
思ひしに咽元過ぐれば熱さを忘るゝとは貴所の事又ぞろ斯く
の如き猥らしき文を御遣はしに成り若し時子が之を父の時政
に見せ時政が怒つて貴所を逐出したら貴所は御身を寄せる所
が御座いますか恐れながら絶えて久しき一丈二尺の白旗を
揚げに相成り御父上の修羅の妄執を御晴らしさる御所に
て候はずや好色も程がある餘の御使は仕るが斯る御使は此源
五決して仕りませぬ、以ての外のみど……黙つて居れば好い氣
になつて何だ馬鹿々々しい這塵物を拙者に波かされて……
頼朝、源五、マアさう憤るな

第十四回

源五は尙も儼然として憤りは致しません唯理の當然を申し上げ
るのでさうでは御座いませんか 頼朝、コレさう大きな聲を致

すおッ 源五、大きな聲は地聲でがすよ 頼朝、源五、其方は戀と
云ふふとを知らぬナ 源五、エ、存じません戀と云ふものは甘
いものか酸っぱいものか、エ、一向に存じません 頼朝、それでは
話が出来ぬ 源五、出来なければしらくつても宜う御座います
頼朝、さう云はれては困る 源五、些ども私は困りません 頼朝、
开所を乃公が頼むのぢや 源五、可いませんよ 頼朝、さう申さ
すに…… 源五、イ、エ可いません、何と云つても可いませんせ
ん、頼朝、此通り主人が手を突いて頼む、此通り掌を合
せて拜む、頼朝、此通り主人が手を合して拜まれましたので流石
の頼朝、源五も弱りました 源五、フーム貴所マア拜む程女が欲
しいかい、どうも驚いたなア、うれ程迄に思召しますか、うれを私
がお断り申しては主従の間で申譯がない、さう云ふふとから宜
しう御座います、主人の爲めには命も差上げて御奉公を致して

朝 夷 三 郎

居る私貴所がうれ程迄に思ふ事を晴らさせないで若し貴所が
御病氣にでもあつたら取つて返しが出来ませんぢやア宜しい
往きませう其手紙を御渡し下さいませ 頼朝うれば忝げない
どうか何分頼む 源五宜しう御座います。ど手紙を懐中に入れ
て出て来たが 源五「ヤ、困つたナ之を持つて往つて先方で諾ど
承知をして呉れ、ば宜いが若し跳付けられて了つて此事が露
顯をしやうものから大騒動、四方に使して君命を辱めざるが臣
たる者の道ぢや、されば受取つた以上はどうでも慙うでも之を
實行させなくつてはあらぬ、ハア先方が少し女が美過ぎるから
ナ、諾ど承知をして呉れりやア宜いが已れの大將は餘り好い男
でもあい色が黒くつて頭が大きくつて女には少し不向な方だ
からナ、ヤッ此奴は姉さんの方が宜い、妹は別嬪だが姉さんは化
物面だ姉さんは誰も手を附ける者が無いから姉さんの所に持

朝 夷 三 郎

つて往けば必ず諾ど承知するに違ひない、宜し〜何でも治ま
りせへすりやア宜いから姉さんの方に持つて往けと酷い奴が
あるものでげず、頼朝源五妹に遣るべき文を姉さんの所に持つ
て往きました、政子様は頼朝の文を御受取りなされて御覽をさ
れると妹へ来た文で御座るが此御方みる絶わて久しき源家の
白旗を掲ぐる御方ぞと見抜いて居りますから之を御自分の物
になされて了ひました、何の妹か夢を姉が取つた杯と云ふ説が
御座います、是等の邊から申しますので御座いませう、女と云
ふ者は顔形は甚だでも心が確乎して居ればうれで宜いもので
お顔は醜いが此政子様御器量があるお胸臆が確乎してゐるで
なされませ、御返事を御認めに相成つて 政子「源五とやら大き
な太儀である宜しう申上げ呉れよ、御返事を差上げる。と出され
ましたから頼朝源五有難い仕合、貴女様から御承知であらうと

て往きました 頼朝「エッ……コレ手前は怪しからぬ奴だ、彼文
は姉の許に持て往けどは言はぬ妹の方に……」 源五「夫れは貴
方可かぬ、姉さんの方が御顔形は悪くつても御胸中は確乎と
して、御座います、殊に姉と妹とは何しろ見識が違ひますから
何でも姉さんの方から貴方が屹度御十分に思召すであらうと
思つて持つて参りました、うれども違つて居ると思召して無為
御歸りに参りましたか 頼朝「ア、無為ではあかつた……」 源五「
ろれならモウ仕方がない早々に北條へ之を御明言爲された方
が潔白で宜しう御座らうと爰で時政に此物語を致す、四郎時政
もモウ巳れの娘の婿と致した上からは尙更らに力を入れ、治永
四年の八月米増峠の八牧の判官兼隆の館を夜襲して兼隆を討
取り伊豆の國石橋山に旗揚を致す所へ平家六目代の大庭、侯野
の両手が討手に向ひ、頼朝戰に敗れ杉山の臥木の空の中に隠れ

しが梶原景時の爲めに助けられ、此處を落ちにまつて武藏の
國隅田川に於いて御旗揚を爲され、陸奥の國の御館權太郎秀衡
の許にありし判官義経と御兄弟の對面を遊ばされ終に平家を
西海の波上に斬靡け源家一統の御代を輝かし給いたる此縁を
るを以つて北條四郎時政が即ち時政の執權北條遠江守時政と相
成り政子の御方が頼朝公の御臺所、此政子の御腹から御出生を
あされたのが即實朝卿でありま、されば當時の執權江間小四
郎義時事北條相模守義時は政子の御方とは同胞でありますか
ら此縁を以つて政子の御方に讒言をかまへて松島の局と朝夷
三郎義秀の縁談を破談させんと謀りしに政子の方は天晴なる
御女性ながら縁に羈かされて之れを信じ和田義盛の三男朝夷
三郎義秀と松島どの縁談を助け松島自殺と云ふ件になります
之れは次回に申し上げます

借北條義時鎌倉の尼御政子の御方に讒を搆へまして義時
 朝夷三郎義秀と松島の局の縁談無事に相済まば此義時は執
 の役御免を蒙つて隠居を致すべし、俾朝時が彼の局故に唯今勘
 當と相成り居るに拘はらせ其片相手の朝夷三郎義秀の許に松
 島を御遣し之れあるは必定將軍には此義時に御宿意あつての
 事に候はん、御宿意無うては此御計らいあるべからせと心得ま
 する、此談愈々纏るに於いては北條の一族何面目あつて他人
 に面を合さるべきや、何卒尼公の思召を以つて北條の家を辱
 にならざるやう御計らひあらまほしく、此段伏して願ひ上げま
 すると甚だ手前勝手な言分で御座います、政子の御方も適れ才
 に優れた御女性では御座います、が女の伶俐は男の馬鹿に匹
 とも申し女子と小人は養ひ難しとも申し、まして幾ら伶俐だど

申しまして女中は大概數の知れて居ります、もので伶俐な
 のが却つて始末が悪いもので御座います、されば頼朝公御他界
 後は尼將軍と謂はれた天下の政を掌つた程の御女性で御座いま
 すなれど、親身の縁には牽かされ易いものと見えまして、北條の
 手前勝年を言分を聞かれまして、政子、尤に心得る、然らば妾よ
 り宜きに計らふべし、事の趣は追つて話を致して遣すべければ
 先づ今日は退るべし、と義時を退げられまして、うれより御文を
 御認めになり將軍御手許へ此度和田義盛の三男朝夷三郎義秀
 と松島の局の縁談の儀は政子思ふ仔細之れあり候へば暫時御
 停めを願ひ度山を申し入れられます、此宣朝卿と仰せられる
 君は至つて御孝心で被居ます、から母上の仰せと云へば何事も
 背くみどはならぬと大層御母さんを怖がつて居られます、母
 に孝を致すは誠に結構な事では御座います、が苟も一天下を掌

る武將たる者が然う、善惡共に阿母の言ふまとは背けぬと
言つて畏懼致して、天下の政道にまで、喉を容れさせるやうな
どではナカ、政治の執れるものでは御座いませぬ、實朝公は
至つて御氣の小さい君と見えなして何事も母の仰せといへば
之をお用ひになりましたから、其れが爲めに鎌倉の天下も三代
にして目茶苦茶にしてゐたひなされたのでありませぬ、儲政子の
御方の御文を御覽なされて相變らず母上のお言葉ぢやからと
云ふので和田義盛の方へ此縁談暫らく見合すべしと云ふ御沙
汰が御座いました、三浦の一族之を聞きまして甚だしい事であ
ると驚くばかり、すると政子の御方は松島の局をお手許にお喚
びなされて、政子、其方に申し聴かずは別儀でない、元と執權北
條義朝の次男相摸次郎朝時が其許に迷うて今は勘當の身と相
成つて居る、思ふ男に身を寄せるが女子の道と云へば、然程に思

ふ朝時を捨て朝夷三郎義秀へ其方が嫁るは女の道に背いたる
こと、朝時は誰あらう執權北條義時の次男にて立派な侍士、今こ
ろ勘當とはかり居れ此政子より一言容れなば忽ちに赦りるゝ
と、其上にて其方と夫婦に致す間速かに朝夷義秀の方を斷るべ
し。と實に怪しからぬ譯で全然權柄づくで御座います、松島の局
は之を聞きまして、松島、情ない其お言葉、開も妾は朝時殿に
想はれしとは云へど別に妾よりは想ひ參らせしどもかく、何
人媒約致してお約束致せしと云ふにも候はず、朝夷殿は將軍よ
りの御沙汰もあり御臺所のお言葉も候て妾も有難き仕合と一
旦御請を致せし上は定まる夫は朝夷殿、貞女両夫に見え申忠臣
二君に仕へずとは往昔よりの教訓されば今朝夷殿を斷らば心
ある人には不貞と呼ばれ爪弾せらるべし、何卒此儀は御容赦下
され此儘朝夷殿へ御遣はし下さりませうづなら有難き仕合せ

に存じ奉ります。と云ふ此一言を聴きまするより尼御臺大きに御立腹を爲されまして政子斷つて朝夷方へ参りたいと申すからには其方は前々より朝夷と姦通を致し居りしに相違なし十分取調べて不義の大罪を糺すべし若し不義姦通を致さぬとあらば朝夷に然程迄義理立てするには及ぶまじ速に朝夷方を断り朝時に嫁すべし先づ今日は退け遣はす部屋に歸りて能く心を定め明日にも妾の方々に返事を致すべし其儘に御殿を御退げになりました松島の局は部屋に引退がりまして熱々考へて見ますると決して朝夷と姦通は致しませんから之を調べられぬて三通の玉章を遣はした事が御座いますから之を調べられますと不義は致さいでも玉章を遣はしたる廉によつて結局は不義に陥れられることであらう然する時は妾の身の上は聊か苦うかけれども朝夷殿に迷惑を懸けては氣の毒な事と言つて

此難を避けんとすれば探を破つて朝時に嫁が母ばならぬ此上は是非に及ばぬ一命を抛ち自害して相果てん、さすれば御臺所にも申し譯が立ち朝夷殿の身の上にも及ぶまじと云ふので遂に書置一通を認め可憐や松島の局は十八歳を一期として自殺を致し可憐花の盛りをむざくと散らして了ひました政子の御方は醜婦であるが爲めに尼將軍とまで言はるゝ様にあり松島の局は鎌倉第一の美人であつたが爲めに斯く哀な最期を遂げました美人薄命とは斯んか事を申すので御座いませう

第十六回

倍本人が慥く命を捨て、了ひました上からは道がの義時も奈何ども詮術なく、到頭此悶着は立消えになつて了ひましたが立消えにからぬのは三浦九十餘輩の人々の腹立ちで御座いますオノレ北條義時政子の御方に蘭言を構へ義秀と松島の局の縁

談を破談させ、未だ其上に局を殺して了つた思へば思へば憎ッ
くい奴、彼を此儘に捨置かば遂には鎌倉の天下を揺撼かし己れ
が併呑を致すやも測り難し、既早捨置く譯には相成らぬ、イデ北
條を討つべしと一齊に起り立たむと致すを本家の和田義盛之
を止めて、必ず一騒がれな今此處に於いて事を荒立つる時は
松島の局の爲めに三浦一族事を起したりと呼ばれ、上への恐れ
も少からぬ、若し事あらば此義盛各方に申入るべし、先づ夫迄は
穩便を專一に……と本家の別當義盛が抑へたので、すから據な
く、唯々無念の切齒をふして居りました、所が爰に唯一人義盛の
言葉を肯き入れませぬ人があります、即ち義盛には孫に當つて
居ます、和田平太在柄の胤長、是れは鎌倉に在柄の天満宮と云
ふが御座いまして、其側に邸が御座います、此人は二代將軍頼家公の
の胤長と申しましたので、御座います、此人は二代將軍頼家公の

命を受けて伊豆の奥野の狩の時に大蛇の穴の中に這入つて、丈
餘の大蛇の上願と下願に手を掛け、宛然唐物屋の小僧が金巾を
裂くやうにビョクとヤツつけたさうで、怖ろしい強い
人もあればあつたもので、御座います、此胤長至つて潔白な侍士
で、義盛の一言を聞いても、どうも心が濟みませぬ、胤長、どうも
お祖父さんは温和主義だ、北條のヘケムコ野郎め、彼奴どうも
己れの目に障つて、蟲が承知をしない、彼奴の面を見ると、蟲酸が
走つて三度の飯を食ふことも出来ん可厭野郎だ、モウ彼奴の面
を見るのも厭やだから、己れは役を辭する、と病氣と言ひ立て、
當節は問注所に出仕も致しませぬ、唯默然として酒ばかり飲ん
で居りますから、家來が甚だ困却を致して、家來、どうか御勤め
を……と申しますと、胤長、イヤ、乃公、どうも心持が悪い、問注
所に參ると己れの蟲に逆ふ奴が居るから、彼奴の面を見て不快

な心持にあつて歸るより寧ろ家で酒でも飲んで居る方が好い
捨て、置け。ど家來の言葉も肯きませんで役を罷めて居り
ます、けれども在柄の平太一人の力で北條を滅し鎌倉の天下を
安泰にするといふ事も出来ませんから何か折あれかしと待つ
て居りますと、同氣相求め同病相憐れむ、眼の寄る所に玉が寄る
と云ふ譬が御座います通り、茲に信濃國に小諸の住人泉小次郎
親衛と云ふ武士が御座います、是亦潔白ある武士にて鎌倉の時
の執權北條義時が奸曲にして權柄を振ひ吾頭を以つて賢能の
士を害し、後には天下を併呑せんとする野心が見えたと見たま
して、北條義時を此儘に捨置いては天下の大事何卒彼れを討つ
て鎌倉の天下を安きに置かむと思ひますけれどもありせんから
に、住んで居りまして許多の家來がある譯でもありせんから
己れ一身にて北條を討つと云ふみども成り兼ね奈何せんかと考

へて居りましたが自分の甥に阿静坊安念と云ふ禪僧が御座い
ます、此者を近く招いて己れの志を明し、親衛其方は是れより鎌
倉に罷越し、鎌倉の武士にて忠義に凝つたる英雄あらば之を味
方に語らい來るべし。と命じました、乃で阿静坊安念談義僧とな
つて鎌倉に下りました、凡て御談義御説法杯はアレは老人が聴
くもので、若い者が聴いては餘り面白くも御座いせんが、疑る
と云ふと又アレ程結構なものはいさうでげす、其中でも御法
談杯と申しますと實にどうもエライもので門徒の先祖の親鸞
上人が餘杯と云ふ錢取道具を拵えてお賽錢を取込みましたか
ら今ではヤレる頭剃る添寝杯と申して色々取方が激くなつて
居ります、傍から見れば何だ馬鹿々々しいと思はれますが、之れ
に凝つて見るとアレ程有難いものはないと思はれます、其頃鎌
倉では大層此の談義が流行致しました、所へ阿静坊安念がやつ

焚手かと思はるゝばかり、眼は爛々として瓦斯燈の如く電氣燈の如く、鼻の大きな眼鏡橋に髣髴たり、口は宛然馬盃の如く両手を膝に突いて座したる容は小山が其所に動き出でたかど怪まるゝばかり、鬼髭左右に生じて見るからして武勇の侍士と思はれまする家來の人達ブラリと列座んで居りまする所へ阿静坊安念看座を致して 安念、エ、お招きにて推參致したる阿静坊安念は愚僧で御座る

第十七回

胤長「イヤ御苦勞で御座る 安念、愚僧は未だ頭顱青く額軟かき者なれども心に思ふ丈の所を説きまする態く出家を招き其談義を聴聞おさるゝ志し、之を極樂心と申す、人を嫉み人を怨み人を殺し人の財を奪ふ心之を地獄心と稱す、唯心淨土孤心強陀、地獄も極樂も皆己れの心より出づるもので御座るされば氣は直

に持ち決して曲れる事を致してはからぬ上見れば及ばぬ事多ければ笠着て暮らせ己が心に「ともあつて不義の富貴は浮べる雲と申す正當に致して天下に名を成し其國の益となり末世に美名を輝かさむとを冀ふべきぞや、人は悪名は遺し易きものににして美名は誠に遺し難きものぢや、されば幼兒の教草にも爺と嬢とあつたどサ、爺は山へ草苴りに嬢は川へ洗濯に、所へ桃が流れ來た、モウ一つ來い爺さんにやろ、ドンブラコ〜、〜、在柄の平太驚きました、此坊主己れの前で桃太郎の「ドンブラコの譚を始めやアがつた、人を馬鹿にした坊主もあればあるものだと思つて居りますと 安念「イヤ、コレが即幼兒の教草で、どバ、の濁りを除ればチ、ハ、どなる开所で父の恩は山よりも高く母の恩は川より深かしと云ふもどあのぢや、桃を割つたと云ふは股を割つてろれから子が生れたと云ふもどである、又

て來ましたが此人は第一辯舌が爽かて學力もありますから、ア彼方でも此方でも安念を招待してお談義を聴聞致します、空しくして過ごして居りましたが或日の事荏柄の平太胤長の邸から招待せられて其邸へ罷越し一と間に扣ねて居りますと家來が其場に参り 家來「ア、御自分かい、安念と仰せられる談義は……」 安念「ハイ、愚僧に御座います 家來「大きに御苦勞で御座る 安念「ハイ 家來「借今日貴僧を此家にお招き申したのは外の事でもちい手前共の主人かどうも當節何か心に濟まぬ事があつて役を辭し歸々として居らるゝによつて、若し御病氣でも出てはならぬと斯う心得て、乃で貴僧を懇くお招き申しお談義を主人に聴聞致させやうと云ふ心得で、唯だ吾々共丈の量見で今日は御苦勞を願つたので御座るからどうか其含みで主

人の氣に適ふ様に一つ願ひたいもので、手前共の主人は餘り佛臭い坊主臭い事が嫌いであるから、さうか好い徳梅式に面白く談義を説いて下さるやうに願ひ申したので、阿靜坊安念「驚きました、ハアうれぢやア落語家か講談師でも喚ぶ氣で己を喚んだのだかと思ひました、荏柄の平太は豫ねて聞いて知つて居りますから此人はさう云ふ人物か兎に角天下に名ある豪傑であるから先づ此の者の志を確めて若し北條を憎んで居る事ならば之を味方に引入れやうと其言葉に氣にも懸けを 安念「委細承知を致しました、何とか宜しきやうに致しませう 家來「うれは大きに忝けなう御座る、ではさうか此方にお出でを願います。と云ふので安念家來に連れられて奥の一と間に來て見ます。と荏柄の平太向ふに儼然として座つて居ります、見ると身の丈は抜群にして其色の黒きふと南蠻鐵か赤銅か燕瀛の石炭

笑手かと思はるゝばかり、眼は爛々として瓦斯燈の如く電氣燈の如く、鼻の大きな目と眼鏡橋に勢鬚たり、口は宛然馬盟の如く両手を膝に突いて座したる容は小山が其所に動き出でたかど怪まるゝばかり、鬼髭左右に生じて見るからして武勇の侍士と思はれまする家來の人達、オラリと列座んで居りまする所へ阿静坊、安念若座を致して、安念、エ、お招きにて推參致したる阿静坊、安念は愚僧で御座る

第十七回

胤長、イヤ御苦勞で御座る、安念、愚僧は未だ頭顱青く額軟かき者なれども心に思ふ丈の所を説きまする恚く出家を招き其談義を聴聞おさるゝ志し、之を極樂心と申す、人を嫉み人を怨み人を殺し人の財を奪ふ心之を地獄心と稱す、唯心淨土孤心彌陀、地獄も極樂も皆己れの心より出づるもので御座るされば氣は直

に持ち決して曲れる事を致してはからぬ、上見れば及ばぬ事多ければ笠着て暮らせ己が心に「ともあつて不義の富貴は浮べる雲と申す正當に致して天下に名を成し其國の益となり末世に美名を輝かさむとを冀ふべきぞや、人は惡名は遺し易きものに、して美名は誠に遺し難きものぢや、されば幼兒の教草にも爺と嬢とあつたどサ、爺は山へ草蒔りに嬢は川へ洗濯に、所へ桃が流れ來た、モウ一つ來い爺さんにやろ、ドンブラコ〜、〜、在柄の平太驚きました、此坊主己れの前で桃太郎の「ドンブラコ」の譚を始めやアがつた、人を馬鹿にした坊主もあればあるものだと思つて居りますと、安念、イヤ、コンが即幼兒の教草で、どヤ、の濁りを除ればチ、ハ、どなる、開所で父の恩は山よりも高く母の恩は川より深かしと云ふもどかのぢや、桃を割つたと云ふは股を割つてろれから子が生れたと云ふもどである、又

ます。ナ。ど何氣なく言ふ此言葉をして在柄の平太胤長今迄の
機嫌能き顔色忽ち變り大眼を開らいて安念をハツタと睨付け
胤長坊主黙れッ、執權北條義時を天下の柱石と何を吐かず彼の
奸物あればふそ鎌倉の天下は今以て安からぬ、余は彼の面体を
見るさへ不快なれば斯く辭職して罷在る、然るに其前をも憚ら
で彼を天下の柱石とは増く言状なり、察する所汝は信濃の者
とは詐りにて北條義時の間者ぢやナ、諸所に參つて義時を鎌倉
の天下の柱石なり杯と言ひ徇らし、人衆を收攬どの計略あるべ
し之を糺すは易けれども長袖を身なればうれに免じて今日は
助け遣はず、今後再び吾郎に来る時は容赦なく掴み殺して捨て
るぞ、目通り叶はぬ退れ……と大音を揚げて呼ばはつたる時に
安念横疊三疊程後にヒヲリと飛退り両手を突いて 安念ハ、
ッ……其御一言を承り安念の喜び何者か之れに及ばむ、今は何

をか包隠まん愚僧事は信濃國小諸の住人泉小次郎兼衡の甥に
て候、叔父なる泉兼衡執權北條義時の惡逆無道を憎み、何卒彼を
討つて鎌倉の天下を萬代の安に治めんと思へども身は信濃に
住み従ふ人数とても候はず、是れが爲めに愚僧を招ぎ、汝是れよ
り鎌倉に行き若し鎌倉に北條を憎しと思ふ忠義の人あらば之
を味方に談ふべしと命じましたから過船來當鎌倉に來り居り
候へども未だみれぞと思ふ人に出會はせ、密かに遺憾に存じ居
り候處匿らず當家より御招きに預り、這は仕濟したりと心に喜
び御目通りを致して直様にも申上げんと思ひしかれど人の心
は御り知られせ、先づ先づ君の御心を探り見んと、今日まで其儀
を口外致さざりしが唯今圖らば鎌倉武士の噂ありやどの御話
ありたればふれ幸ひと存じ態と執權義時を鎌倉の柱石なりと
申せし處案に違はせ唯今の御立腹誠に喜ばしく候、此書を御覽

下されて何卒御疑念御晴らし下され度尙又味方どあつて給は
らば親衛始め吾々の喜び之に過ぎたるはなし。と懐中致して居
りました泉親衛よりの依頼の書を差出しませす。と平太之を取上
げ披き見て怒れる顔色忽ち和ぎ胤長ハ、ア信濃に斯る忠臣
無二の武士ありとは今迄夢にも知らざりき。此書を見る上から
は何をか疑ふべき如何にも承知致したり親衛に宜しく申し述
べられよ。安念大儀であつた。と云ふ言葉に阿静坊大きに喜び然
らば是れより本國に立歸り此儀を親衛の許に知らせ喜ばせる
で御座らう。いで御暇賜はれ。と直様信州に立歸り之を泉小次郎
親衛に告知らせる親衛雀躍りをして喜び猶豫致すことあらず
と直ちに家來十三名を引連れて鎌倉に來り在柄の平太胤長に
對面し胤長を大將と致し自分軍師とあつて鎌倉の武士を集め
たりやな頭立ちたる者七十三名將卒合せて一千五百餘人茲に

徒黨を致して北條を討たんと謀り由利忠八郎惟久の髮心より
隠謀露顯となる件次回に申上げます

第十八回

阿静坊安念は直様泉小次郎親衛の許へ戻りまして衛長水知の
由を語りませす。と小次郎親衛喜びまして然らば既早撥すべ
にあらそ速かに鎌倉へ罷越して胤長に對面致し兎角の謀を定
めんと直ちに信州を出發致し從人十三人と共に鎌倉を在柄
の平太胤長の邸へ参り、密に胤長に對面を致しました。胤長も泉
を見ませすと立派な武士、泉小次郎も在柄の平太を見ると天晴れ
の勇士と見えませす。互に大きに喜びまして評議を致し、うれ
より在柄の平太が密に鎌倉の武士中にて忠義の者を談らひ、味
方に附けたる者が頭立つたる者七十三名總勢千五百人と云ふ
大人數にありませした乃で鎌倉八幡の神前にて一味徒黨の連判

狀へ誓詞血判を致し、愈々北條を討たうと云ふ間際に至ります。と惡も熾んなる時は、天に勝つと云ふ誓の通り、茲に胤長に一味を致したる由利忠八郎、惟久と云ふ者、豫ねて北條より廻はし置きたる謀者にて、此企を義時に告げましたので、義時大に驚き、今鎌倉にて人に知られし在柄の平太胤長が吾を討たんと志すとは捨て置き難き大事なり、さらば君に讒言を構へて彼を滅すべじと、直ちに將軍の御前に罷出で、義時君へ言上致したき大事も、直ちに將軍の御前に罷出で、義時君へ言上致したき大遠ざけて、義時恐れながら三浦の一族在柄の平太胤長事此度信濃國小諸の住人、泉親衡なる者と心を合せ、君を弑し奉らむと謀叛の企を仕りて候、御捨置きありては、由々敷大事、早々御誅戮なされて然るべう存じ奉る。と言葉短に讒言を構へたるを實朝、實朝開は容易からざる事どもなり、然らば

義時、其證據を擧げしか、義時如何にも其徒黨の一人、由利惟久變心致して小臣方へ訴へ出で、委しく相分り候。實朝然らば萬事汝に申し付くる謀叛を企だる奴、片端より擧め上げ成敗致すべし。義時、委細承知仕りました、さりながら此事は和田義盛へは聽えぬやうと、陰に事を計らばうといふ量見にて己れの邸へ歸り腕拱いて考へました、が、在柄の平太は、今鎌倉で人に知られた、大勇の者、之を捕縛致すにはナカ、一筋縄ではいかぬ、何か好い工風はあるまいかと思案を致した末、一工風を案じ出しましたといふのは、其時鎌倉に金窪兵衛と云ふ武士が御座います、此者は北條の御髭の座を拂ふ奴で、義時の手の者で御座います、此奴ナカ、小才の廻る奴で御座いますから、義時此奴を近く招いて、義時、借兵衛此度和田の一族在柄の平太胤長めが、信州小諸の住人、泉小次郎親衛と合体を致して謀叛を企て、捨置き難

き事ぢやによつて早速平太を召し捕らむとするのぢやが其の役目を將軍よりの命令にて汝へ申し付くる人数百人を引連れ早々胤長を召し捕つて参れ逃がしては相成らぬぞ 兵衛へエ
……兵衛驚きましたのは外の者と違がつて在柄の平太は昔に聞る大剛の者此奴を召し捕りに行くのは些と頭痛鉢巻ぢや一つ間違ふと此方の生命が危いがどうしたら宜からうと思ひましたけれど溢々御請を致して自分の邸に立歸り色々勘考を致して漸く一計を案じ出し此の度胤長の方より變心を致して北條へ告げ知らせた由利忠八郎惟久を玉に使はうと斯う考へて密に惟久を自分の邸へ招き 兵衛は由利氏貴公が謀になつて在柄の平太の金てを見破り執權に告げたと云ふが然様かい久ウ如何にも 兵衛其の儀に就いて俺が在柄 平太召し

捕りの役を將軍より仰せ付けられたと云ふので御執權から吩咐かつて参つたが彼の胤長は馬鹿強の野郎で一人や二人や五人や十人では逆もいるんが茲に好い工風がある其工風の種は貴公にあるのだがどうだい貴公一つ働いては呉まいか 惟久ウ、うればどう云ふ工風にやるのか子

第十九回

兵衛は膝を進めて貴公が先づ胤長の邸へ行つてみれ 斯々言ふのだすると先方で斯様々々言ひ返へす宜いか其時に貴公が黙つて居てはいかんだ斯うく 斯様く 言ふと先方が邸を出る氣になる斯うして先づ彼奴を引出して置いてることでソレ彼處で己れが人数を捕へて待つて居て召捕ると云ふふもどにしたら屹度旨く往くだらうと思ふのだが未だ貴公が變心したと云ふふもどは平太は知るまいナ 惟久うりやア知りやしあ

い 兵衛「うれが何よりだ、うれでは貴公、柄柄の平太を一つ誘き
出しては呉れまいか 惟久「宜しい、心得た 兵衛「ぢやア逃さん
やうにナ 惟久「委細承知致したと茲に謀合せまして、うれより
由利惟久在柄の平太胤長の邸へ急遽しくやつて参り 惟久「在
柄殿に對面を致したう御座いますと申入れますと胤長早速惟
久に會ひ 胤長「惟久火急の用とは何事あるか 惟久「大變々々
茲柄殿此度の企悉皆露顯致した 胤長「エッ露顯した、露顯……
惟久「ウム、何者か北條に告げた者がある。怪しからぬ奴で、自分
告げて置きながら白々しいと云ふて居ります、胤長さりと
少しも心付かぬ 胤長「イヤうれは大變だが何人が告げたらう
惟久「誰が告げたか分らぬが、北條が之を聴くと自分の身上が危
いから直様將軍に御目通りをして、吾々共を謀叛人と言ひ立て
たすると將軍は委しいことは御存知あらせられぬから、正に貴

公が謀叛を企君公に敵對をする者と思召して、早々に是等の者
を捕め捕れと云ふので、今此處へ捕手が貴公を召捕に来るのぢ
や、慙う云ふ内も心許ない、拙者はそれを聞込んだから早く貴公
へ知らせたいと急いで参つたのだ、サア、モウ猶豫は出來ない速
に此處をお遁れなさい 胤長「フム、然様か吾斯くの如き大望を
企てしと雖も素より成功せんとは心得ぬ、萬一の事は是れある時
は北條の邸へ乗込んで義時と構刺へて相果てんと覺悟を致し
て居る、されば今事破れたりして此處を遁れ敵に後を見するは
勇士の本意でない、此處に乘込む奴輩何奴此奴の容赦なく、刀は
目釘の積り限り、腕は骨の折れるまで、斬つて斬つて斬りまく
敵はぬ時は其中に斬死をして果てるまでぢや、荏柄の平太胤長
は敵に後は見せぬ、己れは逃げない…… 惟久「イヤ遠がは貴公
の一言遠れ、勇士はさころありたけれ、誠に尤もの一言、ぢやが平

太、うれば貴公一を知つて二を知らぬと云ふのぢや何故あらば
今此處に乘込み來る同勢は執權北條義時が差向けるならぬれ
に向つて十分の闘を爲し武勇を顯はすべく、及ばぬながら拙者
も御加勢望む所である、併しなから今此處に來る同勢は將軍よ
り向けられたのである、然るに之れに抵抗を致したら眞實謀叛
人でなくとも謀叛の大罪に陥いらぬ、吾々の志す所は
君公に敵對致すにあらぬ、即天下の爲めに鎌倉の御爲めに奸賊
北條義時を討つのである、されば今此處で抵抗致して謀叛の汚
名を受け、可惜命を捨てるは是れ即ち犬死よつて一先づ此處を
這れ後日北條を討つて其身の潔白を顯はし、鎌倉の天下を萬代
の安きに治むるふとを得ば、これより無類の忠義と謂ふべけれ
死は一旦にして易く、生は再び得難し、必ず、輕忽の事は致さ
れなうれども何でも彼でも敵に後は見せられぬから將軍御

向の同勢であらうが何であらうが之れに敵對を致して死んで
了はうと云ふ量見であるならば夫迄の事であるが、うれば誠に
馬鹿氣た事ではないか、能う勘考をして見なさい、此處に踏み止
つて開つて謀叛の汚名を蒙るか、それとも一旦此處を道れて後
日首尾能く北條を討つて貴公の精神を顯はすか、二つに一つ、胤
長何れをどる、荏柄の平太腕拱いて考へたか、胤長成程さう言
はれて見るとさうだ、吾君公の爲めに謀つて謀叛と呼ばれるは
誠に口惜しい、では一旦此處を道れ、惟久、それが宜い、猶豫
致しては相成らぬ、拙者と一緒に御座れ、サア早く、足下から鳥
か起つたやうに胤長を急かせて馬に乗せ、自分も馬に打乗つて
裏門から出まして荏柄の天神の一の鳥居の方を指して参りま
す、鳥居の此方の茂みには金羅兵衛百人の同勢を埋伏させ、己
れ弓矢を執つていざや來れど待受け居り、規濟まして遠矢に掛

けました、すると馬は棹立に跳上り平太堪らぬズンデンドーと
落馬致す、ソレツと云ふ聲諸共百人の同勢一度に現れ折重つて
胤長を召捕らんと致す、平太茲に大勇を顯すの一件から捕縛に
なつて繩付の儘問注所に至り執權北條義時と問答の件、次回に
申上げます

第二十回

神をあらぬ身の荏柄の平太は無念や斗宵の小人由利忠八郎惟久
の爲めに賦かれまして天神の森の處まで参りますと、森の中に
居りましたる小鳥は三四羽翹を伸して飛び行きますと、平太は
之を見て馬をヒタリと駐め小首を傾けて馬上なからに何事を
か考へて居る様子 惟久胤長何で進みなさらぬ 胤長「されば
サ、野に伏勢ある時は飛鳥も駐まらずと申す、今彼の森の中よ
う翹を伸して小鳥の飛び去つたるは如何にも訝かし、或は此處

に伏勢でもありはせぬか、迂濶には進めまい。と有繫は心得のあ
る言葉、惟久之を聴きまして「此奴ナカ」油断をせぬ奴ぢや。と
心に思ひました。が 惟久「否々、胤長うれば氣遣あるな、此黄昏時
に拙者と御身斯く入足絶えたる天神の森へ馬を鞭つて來たり
し故、蹄の音に驚いて栖の小鳥が飛去つたのであらう、別段怪む
點もあるまい、サ、進みなさい 胤長「成程、落人は薄の風にも脅
さるゝと豫ねて聞きしが、さうぢやのウ……別々に仔細もあるま
い。と又たトツトツと馬を進めて参りますと、荏柄の天
神の一の鳥居の木蔭に隠れ居たる金窪兵衛弓に箭を番へて矢
頃に来るを待ち規を定めてヒヨーフツと切つて放つたる其箭
過たぬ、羽響打つて荏柄の平太が乗つたる馬の平頸を射貫いた
れば何ぞ堪らむ一聲嘶いて馬は棹立にかりました道かの平太
も不意を喰つたから鞍を覆されドゥと落馬致し、馬は主人を乗

餘輩の一人、荏柄平太胤長に何科あつて繩を掛けしぞ、此平太は
縲紲を受くる覺えはあ、何者の申し付けなるかうれにて速に
言へ、サア吐かせ明白に云はずば奴等片端から蹴殺すぞと怒鳴
りながら縛られたる儘にて轟乎立上がつた權幕に多勢の者、ツ
ツと云つて其の側を飛退きました。金窪兵衛は有樂に惣大将で
あるから己むとを得せ怖々平太の前に参りまして 兵衛「イヤ
胤長殿、今日は誠に好い天氣で…… 胤長「黙れッ。何だ好い天氣
どは…… 日和の挨拶杯を聞く要はない 兵衛「へエ…… 胤長
「イヤ兵衛手前か、斯く乃公を捕縛致したのは、抑何者の吩咐で乃
公を縛つた、乃公は縲紲を受け覺え更らにない不届な事をす
る奴だ、サア此繩を解け速に解かぬに於いては汝を食らひ殺す
ぞ 兵衛「マア、さう憤らつしやるナ

第二十一回

兵衛貴公さう一概に憤つたつて仕方かない、マア、怒りを鎮
めて此金窪兵衛が申すことを能う聴きあれ…… 如何にも拙
者が組子の者に申付けて斯く貴公を召捕らせたには相違ない
併しこれは私事にあらす君命によりて餘儀なく擧げたの
ぢやか、其理由は信州小諸の住人泉小次郎親衛と貴公と合体を
致して執權北條義時を討たうと云ふ企を致されたであらう、然
る處其の徒黨の一人由利忠八郎惟久は正しく北條の謀者にて
其企の趣を残り義時に告げたのぢや乃で義時が我身の危き
に貴公が徒黨を集めたる次第を將軍へ言上し一同を誣ひて謀
叛人にして了つた所が將軍家に於いては之を眞實と思召され
平太を始め其他の奴ばら速に擧め上げて憂目を見すべしと以
ての外御氣色にて兵衛汝に其捕方を申付くる速く致せと云
ふ仰せ乃で拙者も已むを得ず御受けを致し御貸し下されたる

百人の人数を以て御身を召捕に向つたのぢやが其所ぢやテ尋
常に御身の邸に往つて、サア平太君命あり速に繩に掛れと言ふ
た所で貴公は委細承知致しましたと素直に手を後ろに廻はす
人ではない成らば手柄に縛つて見ろと暴れられて見さつしや
い百人位ではナカク押へられるものぢやアおい悪くすると
身共の命まで危いから何でもみれば謀略を以て貴公を押せる
に如かぞと斯う心得て一旦御身の味方と見せ北條に注進に及
んたる彼の由利惟久を喚んで様子を知り未だ貴公が惟久の
變心を知らぬと云ふふとであるから彼奴を玉に使つて貴公を
此處に誘出し不意を撃つたものとあらば方に一つ召捕る事が出
来やうかど弱きまぎれの拙ない謀略ぢや然る處ろれが好い搦
梅に思ふ盡に入つて斯く捕縛となつたはみればマア貴公の運
の無い所ぢや貴公は鎌倉に於いて人に知られた忠義な侍士君

公に對して何も弓彎く筋はあるまいと思ふけれど、奈何にせん
將軍の仰せだから餘儀なく糊つたのぢや、されば繩を解いては
上げたいけれど私に之を宥すとは出来ぬから貴公謀叛を
企てし覺ねがなければ出る處に出て尋常に辯解を致されたら
宜からう斯ういふ次第ぢやから決して私を怨んで下さるな
胤長さうか然らば乃公が豪傑で汝は乃公に力及ばぬから尋常
では召捕るゝとが出来ぬによつて已むを得ず謀略を以つて縛
したと云ふのぢやナ 兵衛「さればサ 胤長「ア、うれから仕
方がない。平太は好い人でござすから仕方がないと言つ
て了ひました 胤長「時に金窪乃公を是からさうするのぢや
兵衛「さうです、是から先づ拙者の邸へ伴ふのぢや、何れ其内に君
公から御糺間があるであらう、其の時には貴公旨く辯解を致さ
れよ先づうれ迄は拙者の邸へお居であれ。胤長を引立て、吾

家に歸りましたが、兵衛十カ、如才ふい奴で御座いますから、小手を授めて胤長に頼りと馳走杯を致し、借此趣早速北條義時に告げ知らせますと、義時大きに喜びまして、尙ほ段々餘類の者を捕へます、此事を泉小次郎親衛疾くも窺ひ知りまして、難なく鎌倉を落ちて了りましたが、阿静坊安念は到頭縛に就きました、そゝで義時、將軍へ胤長捕縛の次第を言上致しまして、早々問注所へ平太を喚出し、糺問の準備を致して居ります、其の時和田左衛門尉義盛は己れの領國に居りまして、夢にも此事を知らず、に居りましたが、鎌倉からの注進にて平太胤長謀叛を企て召捕られたと聞いて、大に驚き、开は容易ならざる大事なりと、早馬を以つて鎌倉へ乗附け來り一族一統を引連れて、登城を致し、將軍へ御目通を願ひました

第二十二回

和田義盛は馳て將軍の御前に出でまして、義盛小臣の一族、和田平太胤長此度謀叛の御咎にて上の御手に御召捕相成りし由、誠に憎き奴めに御座います、義盛之を承はりますや否や、直様早馬を以つて、駈付け斯く出仕つかまつりて候、就ては一族にて能く之れを糺問致し、愈々謀叛を企てしものからば、君公へ分疏の爲め、彼めが首討つて差出すべく候間、何卒彼めを一度小臣共へ御下げ渡し下さり、まするからば、有難き仕合に存じます、何卒三浦一族が從來の忠勤を思召され、此義御許し下され度、此段願上げ奉ります、と、願ひ及びますと、北條義時が傍に居りまして、義時、アイヤ御別當假令三浦の一族如何程に忠勤を盡せし事あるにも、せよ謀叛人ど名の附きたる荏柄の平太胤長を、其儘一族へ御渡しありては、危険至極に候はずや、されば、今此場に彼れを喚出し尋常に糺問を致す、で御座らう、然か致して後將軍

家より兎角の御沙汰あるべし暫時其席にて御扣え下さるべし
 ……コリヤ繩付在柄の平太を庭前に曳けつと北條義時は其處
 に平太胤長を曳据えて糾問の上之れを謀叛の罪に擠し三浦の
 一族に赤恥を擡かせて別當義盛にまで其罪を迨ばし呉れむと
 云ふ心得で御座います、義浦の一族は立つにも立ち兼ねて其處
 に差俯いて居ります所へ、檢非違使役繩の端を把て胤長を曳立
 て、参りました胤長は衣類も寸断寸断に断雙れ、髪髪も散亂れ
 鬼髭左右に振動き血走りたる眼中宛然鵠鵠の如く、凄じき形相
 を致して出て参りますと本家の和田義盛を始めとして己れの
 一族九十餘輩の人々其場に列席して居りますから道が平太も
 面を得上げず俯いて其場に扣えて居りますと之を見て堪兼た
 るか一族の一人古郡新左衛門尉保忠ヅカヅカツと席を立つて
 胤長の前に来り 保忠「什麼、平太、其方は吾一族にて人に知られ

し侍士ならずや何を以つて君公へ弓を彎かんとは企てしぞ別
 當義盛殿を始めとし吾々們鎌の諸役人へ面を向くべきやう
 もなし且又其企露顯れたる上は何故立派に割腹致して相果て
 むるぬめくど細目を受けて斯る處に曳出され吾一族へ耻辱の
 上にも耻辱を得るせし憎い奴、汝如き臆痛なる武士世に又どあ
 るべきかそれども又此席へ斯る見苦しき有様にて出でたるは
 身に辯解の道あつての事なるか謀叛からずどの辯解あるから
 ば疾く此場にて申すべし若又愈々汝謀叛人と定まらば上の御
 手を待たず此新左衛門尉保忠が一拳の下に搦殺して呉れるぞ
 サア平太、申し譯ありや如何返答ぞうちや。と威高にあつて呼
 ばりました、其時平太思はせ首を擡げ 胤長「保忠殿、一族の由縁
 を思へば、あろ御本家始め御身等一同然程迄に此胤長を思召し
 給はる段肝に銘じて忘れまじさりながら我々も三浦一族に

て人に知られし武士なり何を怨んで我君公へ弓彎かんとは企てむ今般思立ちたる企は依奸邪曲の賊を討ち天下を安きに治めんが爲めのみ然るを北條義時奴に其計略の裏を掻かれ我れ却つて謀叛の汚名を受けたりさりながら何とて其汚名を雪ぐ辯解あらざらむされば身の潔白を顯はさむが爲め繩縛の耻辱を忍び斯く此席に曳出されたりいて一族方の忿怒を解いて見せん先づ〱席に着かれよと古郡保忠をば其席に着かしめて置乎と立上がり上席を見れば將軍の傍に執權北條義時威儀儼然として着座せるを見るより堪りかねたかヅカ〱ツと前に進みますると繩を把つて居た三人の者共平太に曳摺られてコロ〱〱と轉がつた強い人もあればあるもので御座います斯くて御縁の端まで進み寄まして忿怒の眼を潤ど開き胤長其席に扣へし眞實の反逆人北條義時此場に出よ平太胤長言ふ

とありと大音に罵りましたさてみれより胤長義時と問答の件次回に申し上げます

第二十三回

一寸御断りを申上げて置きます鎌倉時代の講談は言葉模様を調べて申上げずはならぬ筈で御座いますが講談師は多くは無學で御座いまして別して此貞水杯は全然無學文盲で御座いますから往古の鎌倉の言葉遣杯は能く心得て居りませぬ唯だ俗言でお喋りを致しますので時に依りますと遊人の喧嘩を見た様にペランメーが這入りまますやうを譯で其所は幾重にも御詫びを仕りますす借荏柄の平太胤長が鯛られたる儘にて眞の反逆人北條義時此場へ出よ平太胤長言ふとありと大音を揚げて罵りましたから扣へ居りました鎌倉の諸人何事が始まるかと片唾を呑んで様子を見て居ります北條義時之れを聞くより

大に憤り 義時、黙れ平太、汝斯、細縛の儘にて曳出されおがら
此義時に對して無禮の一言奇怪あり、被曳者の小唄どやら、汝將
軍へ弓を引き又しても此席にて我を罵らむと致すか、速に謀叛
の罪に伏せ。在柄の平太大口を開いて。カラ、どうち笑ひ胤長
汝我を謀叛人と申すも、ところ奇怪かれ三浦九十餘輩の中にて
人に知られし在柄の平太、君公に忠義の志は他人に一歩も後れ
ず、何條君公に弓引かむや、然るを汝我を謀叛人なりと讒せし段
憎き曲者なり、證據あらば疾く示せいざ聴かむと、猛り立つを
義時、オ、汝が泉小次郎親衛と合体して多勢を語らひ君公へ弓
を彎かむと鶴ヶ岡八幡の神前にて一味徒黨の連判狀に誓詞血
判を致したる事訴人あつて確かに知れり、然るに其徒黨の一人
泉小次郎は事の露顯せしを知り風を喰つて逃亡せしが、其手に
從ふ阿靜坊安念は搦捕つたり、此者の所持致せし連判狀、我手に

入つて委細明白、サア、みれにても尙謀叛でないと申すか、どうぢ
や、胤長如何にも汝が申す通り、泉親衛と心を合せ一味の者を
語らひ鶴ヶ岡八幡の神前にて連判狀に誓詞血判を致せし、みど
覺にはあり、決して覺にかいと申さぬが、將軍へ弓彎かんとせし
覺には更らになし、抑此度一味徒黨を企てたるは、眞實の反逆人
たる汝を此儘差措く時は鎌倉の天下は危殆しと忠義に厚き武
士を選び、汝を討たんと謀りしのみ、然る所汝の謀者由利忠八郎
惟久詐つて吾が一味となり、密に之を告げたれば、汝身の危さに
吾々を謀叛人と讒したるを上にては深かき事情は御存知な
ければ、汝が毒言を眞實と思召され、平太を恠くは召捕らせしお
らむ、又阿靜坊安念も汝の爲めに召捕られしは、殘念ながら、其連
判狀、汝の手に在りと云ふころ、面白けれ、安念も謀叛とは言はざ
るからむ、由利忠八郎とても汝の方へ訴人致せし時、平太及一同

の者君公へ弓彎く志とはよも言はざりしならん、是れ全然汝の
心より取構へたる捏造なる事、證據證人あれば何より明白、速に
忠八郎惟久及び阿静坊安念を曳出し、此所にて平太と突合せ、正
當の糾問致して見よ、理否曲直自から明白ならむ。と言はれて義
時ウムと詰りましたのは如何にも平太が申す通り、將軍へ弓彎
かむどての企謀とは全く我捏造にして謀叛とは安念も言はる
ければ惟久も言はず、連判状の誓詞の面にも書いては御座いま
せんされば、われ等の者を此場に出しては面倒だと思ひますか
ら、義時「アイヤ、われ等の證據證人出すまでもない、鶴ヶ岡八幡
の神前にて一味徒黨の連判状を調製ひたるは取りも直さず是
れ謀叛、胤長、黙れ、義時、縦令一味を爲し徒黨を企て、連判状へ誓
詞血判を致せばとて、將軍へ弓彎かすして謀叛と云ふ論やある
汝權威を以つて平太を壓伏せむと致すとも、それを恐るゝ、我お

ら、サア證據を出せ、證人を喚出せ。と向も大聲にて、猛り立てる
のを見ました大江因幡守廣元進み出で、廣元「如何御執權、將軍
の御前にて胤長がアノ大聲甚だ聽苦し、證據あれば何より明白、
其連判状を速に此場に出して彼が罪を明に定めあつて然る
べう存ず。と言はれて、義時、最早出さぬ譯にもいかせ、義時「如
何にも此處お所持致す、然らば連判状にて罪を定むべし。と懷中
したる連判状を取り出し、義時「其場に扣ねたる金窪兵衛、汝此中
に記されたる平太を始め一味徒黨の姓名を讀上ぐべし。と金窪
兵衛に渡し、ました、兵衛「心得候。と連判状を受取り、在柄の平
太を筆頭として七十名の人名をつつと讀上げて参りますと
義時「オ、それにて止めよ、サア胤長、汝此くの如く多勢を語らひ
ながら、尙謀叛人ならずと言張るか、胤長「さればなり、汝今姓名
のみを讀上げさせ、其趣意は未だ分らず、如何なれば、慙く神文督

詞を致したりどの文面判然として認めあらむ、サア兵衛其場に
て讀め……。金窪仕方がないから讀まうとするど、北條は其文を
讀むには及ばぬと口に出して言ふ譯にもいきませんから、唯だ
顔で稻光をさせて兵衛に知らせます、金窪兵衛北條の顔色を見
て、「コイツ無闇に讀むと後で嚇し付けられるぞ」と思ひましたか
ら讀む事も出来ずモヂク致して居ると 胤長、兵衛サア讀め
……何故疾く讀まぬと急かれるから遠がの金窪兵衛弱り切つ
て了ひました、平太には催促をされる、北條には面で稻光をされ
る、彼方立つれば此方が立たぬ此方立つれば彼方が立たぬ、九尺
二間に戸が一枚、両方立てれば身が立たぬ、娼妓させては男が立
たぬと云ふて請出す金子はなし……ナカク其様を都々一所
ではありませぬ、奴間に這入つて弱切つて居ります、と荏柄の平
太之を見て苦笑を致し 胤長、兵衛、汝は北條の權威に怖れて其

誓詞の文面を讀むとが出来ぬと相見ざる、可し……如何
古郡保忠殿胤長御身に頼むとがある、金窪兵衛の讀み得ざる
誓詞の文面速に其席にて御讀上げを願ひたうござる。聴くより
古郡保忠、心得たり。と其席を立出でますと北條が「アイヤ保忠、雲
時雲時

第二十四回

保忠思はず立止まりますと 義時御身は三浦九十餘輩の一人
にてゐれる荏柄の平太とは親族あり大切なる連判状御身に
渡すとは相成らぬ、御相見えあれ 保忠、這は御執權の御言葉と
は覺えず、縦令拙者親族の者なりとも慙る御席にて其文面を迂
論に讀上げるふと相叶ふべきや、拙者平太と一味ならざる証據
には潔白に此場に於いて之を讀上げむ御止めあるは拙者を
論の者と思召してのことならむ、されば此儘後に退くときは武

士の面目立ち難し、此文面は是非に拙者讀上ぐべし、若し又此古
郡保忠に迂論の事あらば平太と同罪、聊か御恨みとは存じま
ぬ……兵衛拙者にうれを渡されよと保忠連判狀を我手に取上
げ推披いて高らかに讀上げる

北條相模守義時、内縁に因つて妄りに權柄を振ひ舌頭を以
つて賢良を譴害するものと甚だしく四海の政道日に亂れ鎌倉
の天下危きこと累卵の如し、誠忠の士之を見るに忍びず逆賊
北條が一家一族を討滅し以て天下の蠱毒を除かんと欲し茲
に同志相集り血判を以て神明に誓ふ然る上は万一此誓詞に
背きて變心する者あらんには八百万の御神別しては鶴ヶ岡
八幡の御附立ち所ろに至たるべきもの也、依つて神文誓詞如
件

崔柄平太胤長

泉 小次郎親衛

此兩人を筆頭と致しオラリと列記したる姓名を悉く讀上げた
すると崔柄の平太一足前に進で胤長如何、義時今讀上げたる
文面に將軍へ月變くと云ふ康ありや、謀叛人とは却つて其方の
みどあり、汝の父北條四郎時政は蒲冠者範頼殿に詰腹を切らせ
忠臣畠山重忠を亡ひ、仁田四郎忠常を殺し、利へ恐れ多くも二代
頼家卿迄を弑し奉り、事破綻れて隠居仰付られしが其時汝は父
の企謀には更らに與みせずと稱して己れ一身を清くし、二代の
執權職を勤むるもど、なりしは御内縁によるどはいへ又有る
まじき御鴻恩あるに先代の悪名を雪がむどはせせ却つて惡逆
日々に増長するのみならず勿体なくも當君を亡ひ奉り鎌倉の
天下を併呑致さむ企圖今は早や明白あり、されば胤長不肖と雖
も其儘に捨置き難く泉親衛と心を合せ汝を討たむと謀りしに

無念や取るにも足らぬ小人由利忠八郎惟久の爲めに事洩れ、慙
く就縛の身とはなりたり、されど天道何とて正を照らさむらむ
今請上げたる文面に我等謀叛の證據ありや否や、いざ義時返答
奈何にど大聲に呼ばりました之を聞き居る諸役人ふれでは何
方が糾問られるのだから譯が分らないと思つて居ります、三浦の
一族は和田を始めとして一同平太か愉快の言葉にツク、喜
びまして先づ是れにては平太に謀叛の罪はない、北條の奴こそ
憎みても尙餘りある奴なれと思ふて居ります、御座の中にも
在ありし尼公政子の御方が「胤長扣えよ、汝詭辯を以て北條を言
伏せ、謀叛にあらずと申し立つれど、汝が謀叛の證據は既に判然
たり、速に伏罪致せ、さうぢや……」胤長「這は尼御座の仰せとも
覺えず拙者謀叛の證據那邊に候や恐れながら其儀伺度う存じ
ます 政子「オ、明かに示して得さず、保忠唯今の文面今一應

しげよと復た連判狀を古郡保忠に讀ませまして「北條が一家一
族を討滅しと云ふ所まで來ますと 政子「うれにて止めよ……」
サア胤長汝何故に茲に北條の一家一族とは書きたるぞ、若し義
時一人を討たむとならば何とてさは書かさざりし、妾は四郎時政
の娘にて當時の執權義時とは同胞あり、殊に當將軍實朝卿は此
政子の産み奉りし所にて、御縁を以つて言はゞ妾は其母、北條は
其叔父、されば一家一族と云ふからは此御縁ある將軍家へ「弓
彎かむ心得なるべし、唯だ明白に記さむらひしは事若し露顯に及
びしと辯解の爲めにどて斯くは圖りし事ならん、斯くても其
方將軍へは弓彎かぬ謀叛は企てぬと申するか、ど柄の無い所に
柄を付けたは有醫は尼將軍の智慧で御座います、平太は之を
くより大口を開いてカンラカラくど打笑ひました、さうも鎌
倉時代の勇士の笑方は違つたもので宛然洋燈屋が地震にでも

遣つた縁にカンラカラカラと笑らひましたさうでげす……
長「這は尼公の御言葉かれど其意を得申、忝けなくも將軍家は
清…天皇の御末裔六條判官爲義の御嫡子左馬頭義朝卿の公達
右大將頼朝公の御胤に候はずや、さて又た尼公は平家ある北條
の家を生れし御方に候へども女子には七去三從の戒あり幼き
時には父母に從ひ嫁しては夫に從ひ老いては子に從ふ之を三
從とは申すあり、されば幼き時は父母に從ふと云は、北條四郎
時政の娘平政子君と謂つべく、嫁して夫に從ふと云は、右幕下
頼朝公の御臺所にして源氏の政子君、老いて子に從ふと云は、
當將軍實朝卿の御母上に渡らせられ是れ亦た源氏の政子君、平
家なる北條の家に御縁は聊も之れあるまじと存じ候、女子は三
界に家無しとも申すものを何とて北條義時と當將軍家と縁の
叔父甥など云ふ筋あらむや、ア、ラ愚か言を仰せらるゝもの

かな、アツハ、ハ、ハ、と復た大口開ひて笑ひました、道がの政子も
理の當然に「ウン」と詰て御一言もかく將軍は最前より黙して之
を聴き遊ばされて、御座いましてが、實朝如何胤長、汝が最
前よりの辯解により此實朝へ弓◎く企ありしども思はれず、さ
りながら我膝下を憚らせ一味徒黨を企てたる廉穩かあらず之
に因つて其方は奥州信夫の里へ流罪申し附ける。と仰出されま
して遂に胤長は奥州信夫の里へ流罪と云ふるにありました
が平太の爲めに逆賊と呼ばれたる北條義時をば其儘にお捨
にあり、且つ義時も野面にて執權の職に居りました、うこそ別當
義盛大いに憤り、胤長の二の御を踏むにはあられも我年既
に七十の坂と越に餘命とても長からせ、我若し没する時は鎌倉
の天下は義時が爲めに併呑せられむ、されば我れ一つには先君
への御恩報じ一つには當將軍へ御用納めに彼の北條義時を討

ち以て天下の靈賊を除かんぞ斯う考へまして一族九十餘輩の
人々に此物語を致し愈々和田合戦と相成る、一息吐きましてか
ら……

第二十五回

借荏柄の胤長は奥州信夫の里へ流罪の身とかりました其後
の事で、和田左衛門尉義盛より三浦九十餘輩の人々へ、義盛
御談し申度事之あるにより拙者邸へ御集りを願ひたいと申
はしましたので、本家よりの仰越委細承と云ふので皆な此和
田の方へ集合致しました、すると義盛一同に對つて 義盛「借御
一同這回荏柄の平太胤長奥州信夫の里へ流罪と相成りしが此
御成敗を各々方は如何と思召さるゝか其所存を承りたう存す
る。一統の面々之を聴きまして、さればにて候、謀叛の罪はなけれ
ども徒黨を集めし科は免れ難しとの仰せにて此の御所刑、是れ

誠に御順道ある御成敗と吾々は心得ます 義盛如何にも平太
の身に取つては難有き御成敗にて兎や角申すことは毫もあけ
れど、然程の罪ある胤長の爲めに問注所に於て謀叛人よ逆賊よ
ど罵られ、一言の辯解をもなし得ざりし執權北條義時を其儘に
御捨置と相成るは奈何にも心得難き事なり、されば義時にも隠
居仰付けられ其跡を伴式部丞泰時へ仰付けられてこそ御順道
の御成敗と申す可けれ、さりながら是れとても我君依怙の御沙
汰を爲されしにあらず、畢竟北條義時の権力に壓され給ひ君た
るの御威光立たざるが爲めぢや、されば若し此儘に捨置く時は
天下は遂に彼が爲めに併吞せられんは必定なり、義盛若し年若
く餘命尙長からんには又心盡しの術もあれど、最早年七十の坂
を越に老先短き此身、愈々眼を眠らむ其時は誰恐るゝ者もなけ
れば彼の北條の逆賊め直ちに天下へ手を掛くべし、是れ誠に義

朝夷三郎

盛が心懸り、されば胤長の二の御を踏むにはあらねども先君への御恩報じ又當將軍への御奉納めとして、義盛息ある内に彼の北條めを討ちとり源家万代の基礎を確めたしと心得る各々は如何思召さるゝや。と赤誠面に溢れての言葉に、九十餘輩の面々何れも奮つて之れに同じ一同實に御本家の御言葉御道理至極に存せらる、何とて吾々異議を狭まんや、开は面白し、うれ...

朝夷三郎

て暇はせ必を鎌倉御所へ遣入るからむ、斯れば彼を討たむ爲め餘儀なく鎌倉御所へ兵を進めばあらぬ、既に御所へ兵を向けしとあらば將軍へ對して弓を彎く謀叛人と言はるゝは必定幸ひに首尾能く義時を討取りて、此義盛が切腹致し、將軍の御膝下を騒がせたる罪を謝しおば我一族忠義の志も世に顯はるべきを長く汚名を蒙りて一家茲に絶え果つべし、されば此所一期の大事にて候へば各々方にも其心して必を急驟り給ふな、尙秘密の談合も有れど、開は追て御沙汰に及ぶべし、必ず共に舉動は慎み一族の方々五人とは一所に集會せられなよ若し又急に事起らば我邸の太鼓を、つべし、其時は何れも即時手前邸へ御進み下され、今日には先づ此儀を御一同に御話致すまで、總ては期を定めて御談合致すべし。と茲で一同散會を致して各々邸々へ

朝 夷 三 郎

辰りました。が、其中に三浦平六兵衛義村といふ人がありました。が、此人我郎へ歸りまして、熱く勸考を致します。には、本家義盛殿の言はるゝ所如何にも尋常にして、道理には聴ゆれども、義盛殿も言はれし如く、白晝旗を進めて北條の邸へ押寄せるとは甚だ危き企計、北條が邸に踏み止りて戦はゞ宜けれども、若し御所へ逼込まば己むおく御所へも謀叛と名の附きし軍に勝利は得たる例無る。往昔より假りに謀叛と名の附きし軍に勝利は得たる例無し。是れは悪くするに破れるわい、併し卑怯に夜討を蒐けると勸める。尋にもいかぬ、ハテ困つたみどではある、若し此軍にして破れなば三浦九十餘輩悉く謀叛の汚名を蒙つて家隔絶、先祖の祀も絶ゆる譯、さありては先祖へ申譯なし、嗚呼何ぞ致さば宜からう。と一人思案に沈んで居りました。が、屹度思附き仕方がない、三浦の一同へは甚だ濟まぬ話あれど、吾は一人約を背いて此事を

朝 夷 三 郎

北條へ告げやう。己が告げなくても、白晝兵を進めて北條の邸へ乗込まば何の途義時に分るゝとちやから早晩分ることならば己が茲で告げた方が宜い、さすれば和田が軍に勝つ時には己が申辭に切腹致しても後に残りに残りし一族が三浦の家を立てるであらう。又和田の一族が敗軍にあらうとも、拙者一人北條へ反り忠をし、て置かば後に残りて三浦の家を立て先祖の祀も絶やさず。に濟む何方が負けても勝つても家を潰さぬやうにするには拙者一人愚漢どなつて北條へ反忠をするに如何ぞ。訝お所に心を迷はせました。是ぞ和田が武運の甲斐ない所で御座いませう。うゝで義村内密北條義時へ之を告げました。所が義時驚いたの驚かぬのといつて抑天をして驚かしました。今度なかく、荏柄の胤長如き者のするとは御座いませぬ、三浦九十餘輩の人々が一塊にあつて北條を討つと云ふので御座いますから、スハ

百三十八
我身の一大事なりと即刻將軍の御前へ罷出で人を遠ざけて
申すやう 義時「恐れながら天下の一大事出来仕りて候、此度在
柄の平太胤長奥州信夫の里へ流罪に相成りしを三浦九十餘輩
の者共君の御計らい無情なりと恨み奉り愈々謀叛の企謀を致
し候なり速に近國の諸大名へ御陣觸仰渡され和田一族を御誅
罰あらせらるべし」と讒言を構へました、

第二十六回

將軍之を眞實と思召され 實朝然らば猶豫し難し、早々近國の
諸大名へ陣觸を致せどあつて安房上總下總常陸相模武藏上野
下野關八州の大名へ鎌倉に於いて三浦九十餘輩の者共謀叛を
企てたり早々軍勢を從へて鎌倉に集るべし」と陣觸を致しまし
て愈々兵を進めると云ふふどにかりました、三浦一族の者に於
きましては怒る事とは一向氣も附きませぬ、義盛とても其通り

夜陰一と間に在つて鎌倉の繪圖面を前に取披げ北條の邸の摸
様を査べ此所より兵を進めて是れへ乗込み敵此場へ廻らば此
所を斷切らむ杯と軍勢手配の思案に餘念なき所へハタ
て見ますと、障子を開いてピタリと兩手を支へ「父上一大事出来
仕りて候」と言は三男の朝夷義秀 義盛「一大事と云……何事が
起りしぞ 義秀「されば這船の大事三浦中六兵衛義村の變心よ
り北條義時に洩れ義時將軍へ吾々を謀叛人と申し立て近國の
大小名へ陣觸を致し候由最早や御猶豫相成ら……此注進を
聴くより遠がの義盛「呀、一言少時は默然として居りました
良久ありて、一族の中にも三浦義村は家柄の武士、されば夢にも變
心杯とは思ひも寄らざりしが、其心を見損じたるは義盛生涯」

過誤されども既早詮なし、猶豫致す時にあらず先んずれば人を
制すといふとあれば今宵の中に人数を集め北條の邸へ押寄せ
ん三郎用意……と言ひも終らぬ乎と起上がり、側ある鐘を取
つてザックと着下し、義秀に下知を致して豫て合圖の太鼓をドゥ
と打鳴ました、一族の面々之れを聞いて驚破哉御本家に急
變ありと急ぎ身支度を致し郎黨を従へて義盛の門前へ集りし
者宛然雲霞の如くでやり、まず此時義盛立出て一同に向い「什麼
に各々急に太鼓を打鳴らし此處へ御集め申せしは他の儀にあ
らず、此度の企謀三浦義村の變心より事の破綻と相成りたり、さ
れば一刻も猶豫成り難し直様みれより北條の邸へ夜討を蒐け
む、いざ用意を致して進まれよ」と云ふ一言に一同心得たりと
男み立ち總勢七千八百餘人鯨波を作つて北條の邸へ乗込むこ
とにありますと、一方の北條義時は今にも和田が人数を進めて

参りはせぬかど唯だ怖れ保へて居ります折柄故、和田方の様子
をば終始謀者を以つて窺つて居ります、其謀者が立歸つ
て、恐れなから御注進仕る、唯今和田義盛三浦九十餘輩の一族を
従へて御常家へ乗込む様子に御座りますと云ふので北條義時
大きに驚き遽に玄關に走り出で 義時牽けッ……馬牽げッ。と
呼はり家來の者の牽き來るを避しと焦燥ちヒラリ馬上に跨る
ど其儘一鞭加へて驀地に御所内に逃げ込まんぞ致す所へ式部
丞泰時走せ來つて馬の轡を確乎と拉へ 泰時お父上深夜に及
んで馬に鞭ち何處へ御出でなさるか 義時「されば今三浦九
十餘輩の一族謀叛を企て鎌倉御所へ人数を寄するとの注進あ
り若し君公の御身に万一の事あらんには由々敷大事、吾先づ是
れより御所に罷出で君公を警護し奉らむ、汝は後より郎黨を引
連れて至急御所へ罷出づべし確と申し付けたぞ、父が此言葉

朝 夷 三 郎

聽くより泰時頭を振り 泰時イヤ〜 お父上、和田義盛が這般
の流刑に處せられし折柄、平太の爲めに罵られたる父上を將軍
其儘に差措かれたるを憤り當家へ軍勢を寄せ父上を討たむ
との企に候あり、若し父上我邸を去り御所に御乗込みある時は
和田義盛餘義なく兵を御所へ進むべし、さすれば御所を合戦の
巻どおし却て君公の御身を危うする道理、又和田義盛は忠勤の
譽高かりしに今御所へ兵を進めさせ謀叛の徒と呼ばすること
如何にも憫然の至りに候はずや、何卒お父上肩よく此處に敵を
待ち常家存亡の職を致し、我れ運に叶はば敵を夷げ我れ運拙く
ば尋常に義盛の爲めに討たれ給へ、是れ武士の本懐なり、若し今
お父上御所に入り給はば北條の汚名天下万世に傳はり候はん
此儀は斷つて御止りを願はしう存じます。と切り諫むる言葉

朝 夷 三 郎

を聽いて義盛大いに憤り 義時黙れツ、汝君公の御大事を餘所
に於いて我れを此處に止まらせむと致すと以ての外なり、汝此處
に居るナ、君父を顧みぬ不届奴めが……放せツ。と鞭を擧げて懲
に掛けたる泰時の小手をビッとした、かにかに打ちましたので
泰時手が痺れて思はぬ拉へし手を放すと義時は其儘馬に鞭ち御
所内へ飛ぶが如くに遁込みました、跡見送つて泰時は嘸ど息を
吐いて嘆息し 泰時「ハア、ア、殘念あり和田の一族へ無き名を
負はせ我が家は長く天下の胡虜となる事か……嗚呼、今更ら何
と致すとも我が力の及ぶ所にあらず、何事も知らざる郎黨を此
處に駐むるも父上在さねば何の益もなし、今は是非に及ばぬ
と軍勢を引連れて後より御所へ乗り込みました其跡へ和田の
軍勢が押寄せて参りましたが北條の邸は蕪抜きの殻、早や義時

は御所へ逃げ入りたりと云ふを聴き義時切齒を爲して 義時
嗚呼早手遅れとなりたるか此上は是非に及ばぬ御所へ兵を進
めよ人は謀叛を謂は言へ義盛が精神は天神地祇の知召す所
ソレツ進めツと兵を進めるみれからが有名なる朝夷義秀門破
りの御話で御座いますすが次回に於いて辯じます

第二十七回

和田の總勢はふれより御所に押寄せむと茲に手分けを致しま
したが大東の御門に進む大將は古郡新左衛門尉保忠西の御門へ
進む大將は土屋大學介義清北の御門へ進む大將は和田新兵衛
朝盛南進手鐵御門へ進む大將は朝夷三郎義秀と相定め残る兵
を義盛自ら引卒して鎌倉雪の下の間道を取切り十分の手配を
致して四方より御所を指して乗込んだり中にも南進手鐵御門
へ進みたる朝夷三郎義秀は中三權守兼遠の娘頼繪の腹より出

生致しましたもので御座いますす開も此頼繪御前と申すは木
源義仲の胤和田とは爲さぬ仲であります之をどう云ふ譯で自
分の子に致したかど申しますと既に木曾義仲が宇治瀬田の両
手を敗られて粟津の原にて戦死を致せし折の事で義仲は早や
宇治と瀬田どの軍が敗れましたから都に歸らぬ本國へ落ちや
うと致しました時に誰あつて其殿を致す者が御座いませぬ
すると其時まで傍に附随つて居りましたる頼繪が不肖には候
へ共妾此場に踏止り敵を遮り申すべし疾々御落ち遊ばし候へ
と健氣ふる一言にさらばと五百の兵を頼繪に授けて殿をさ
せ義仲は此處を引上げるみどになりました頼繪は一手の兵を
纏めて關東源氏の來るを待つて居ります所へ八百餘人を引卒
し砂煙を立て、乗込み來つたるは關東源氏の一人武藏國の住

人内田の三郎家なり納繪は之を見て莞爾と打笑ひ 納繪ア
ナ物々しき敵の舉動やいで 我が働きを見せて呉れんづと
大薙刀を打振々々内田が同勢の真正中に會釋もなく割つて入
りしに對抗ふ敵を無残なれ剋手薙手排手十文字眞甲眞底蓋
手脇當四天直垂内兜而類綴菱動ぎの糸受筒ガツタリ涎掛菊閉
梅檀靴龍の環受暗綿嚼八幡座奴豆腐に玉霰或は笹の目千六本
羊美屑に切山椒と切りましたさうでげすが豪ちい働きをする
女もあつたもので御座います此働きに怖れてか唯一人對抗ふ
者もなき様子三郎家吉遙かに之を眺め 家吉「アラ適ばれある
勇女かな豫ねて聞く木曾殿の妾納繪とは彼女あるべしいでや
彼を手擒りに爲し吾が妻と爲さんづと馬を乗出したさうでげ
すが此奴中々好色な奴だつたぞ見えます 家吉「アア〜うれ
あるは納繪女と見たは僻目かいで引組んで勝負を決すべしと

大手を廣げて乗り蒐かる納繪之れを見て莞爾と笑を含み 納
繪組討勝負は照も所にあらねども仰せとあれば已むを得ぬ卒
ざ来い來れど此方も亦た大手を廣げて馬駈合せ、エイヤツと引
組んだが納繪は三郎の上帯に手を掛けて 納繪「ヤツと云ふ聲
ど其に家吉を鞍坪より我馬の鞍の内輪にグイと引付け 納繪
ア「可愛の男子やナ能くぞ納繪に組討を望まれしよ死出の旅
路の道連れには究竟の者三途の川の瀬踏をし給へやと言ひも下
らぬ三郎の首と胸に手を掛け引斷離つて打ち遣つたと云ひま
すが恐ろしい真似をする女もあつたもので……之を見るより
八百の同勢怖ぢ畏れ脚の子を散らすが如くに逃出す納繪は此
兵を薙立て 散々に追散らしまたが先づ我兵を纏めて
一息拂と吐き少時息んで居る所へ又たもや乗込み來りし關東
勢は是れぞ和田左衛門尉義盛未だ小太郎と申せし頃の事で御

座いまず義盛は柄繪の兵を見るより直ちに打つて蒐かり勝を
一舉に決せんぞ激しく戦ひました。此時に柄繪女は薙刀を以
つて近寄る敵をバラリと薙立て居りました。如何なる機會
か薙刀がボツキと二つに折れました。から之をば投捨て此方
に在りし松の木を一本根抜に致し之を打振り、戦ふ様子小
太義盛見るより荒爾と打笑ひ、義盛高の知れたる女の腕立
何程の事やあらむ目に物見せて呉れんづと之れも同じく傍を
る松の幹に手を掛けてヤツとばかりに根抜と爲し柄繪の馬前
に立塞がり名乗を揚げて打つて蒐れば柄繪も心得たりと渡り
合ひ暫時松の幹と幹とでパチーリと打合つて居りました
が到頭幹は打折れて了つたので互に松を投捨て馬上をがらに
ムンゾと組みしが馬が離れて二個共々両馬の間に控と落ちる
所へ義盛の同勢走せ来り折重つて到頭柄繪を觸れ上げて了ひ

ました

第二十八回

ろみで木曾の同勢も悉く破れ義仲も粟津に於いて戦死し關東
源氏の大勝利となりました。其後平家の一族を西海の波上に塵
にし頼朝の鎌倉にて武將と仰がる、事と成りました。から石橋
山に旗揚をおし、より忠勤を勵みました。侍士へ夫々御恩賞
を下され、或は任官を致され、或は領地を賜りました。中に義盛も
左衛門尉に任ぜられ上総一郡を此度の御恩賞として下されま
した。然るに義盛將軍へ願ひまするやう、義盛此度上総一郡を
御恩賞として賜はり忝けなくは候へども、開は上へ返上仕り、其
代はりとして義盛御願ひの向之あり候、曩きに木曾殿と合戦の
折中三權守兼遠が娘柄繪女を生擒に致し、今に其儘拙者方に預
り居ります。此柄繪をば頂戴仕りて拙者妻と致したく、此儀願

朝 夷 三 郎

上奉る。と言上に及びました、尤も此時は和田義盛の妻は死亡り
まして無妻で居つた頃のこととございます、上総一郡に換へて
頼繪女を申請たいと申しますると、何とやら女色に溺れたやう
にて和田に似合はしからざるも、思はれますが、斯る稀れを
る勇女を空しく殺すに忍びず、且つは之を娶らば適れなる勇士
を得るであらうと云ふ考であつたこと、見えませぬ、斯る例は随
分無きにしもあらず、彼の源三位政頼が菅蒲前と云ふ妃を近
衛の院より拜領したことが御座います、是を仁平の四年五月十
二日の夜、蠶目の法を以つて水破兵破の二箭にて空と云ふ怪獸
を射て落せし功により菅蒲の前を頂戴致し三位兵庫頭に任せ
られました、其前は四位侍従と云ふ何だか焼火箸を水の中に突
込んだやうな鹽梅式でげすが、さう云ふ官位に居りましたので
されば頼政述懐の歌に

朝 夷 三 郎

上るべきたよりおければ木の下に
推をひろひて世をわたるかな
と云ふ歌が御座います、然るに這回怪獸を射たる功によりて三
位兵庫頭に任せられ、其上に宇治左大臣の御取次にて御子王の
剣を頂戴致しました時に折知り顔の郭公一聲二聲雲井に名乗
るを聞いて左大臣が
郭公名をも雲井に揚ぐるかな
と仰せられしかば頼政取り敢へて
弓張月のいるにまかせて
と下句を附けました、が主上の歌感斜ならぬ、何を頼政が望む所
のもの遣はさむと思召ました、が不圖豫ねて頼政が菅蒲前を
垣間見て心を通はせ居ると云ふに思當らせましたから、うみで
態と菅蒲前に似たる妃三人に同じ様な衣裳を着せて菅蒲前と

却説斯様な例も御座いますから和田義盛も彼の納繪女を懇望
いたしましてした、すると頼朝公も聞きなされて頼朝然らば上總
一郡に悉へて納繪を遣はすであらうと仰せられて茲で納繪を
賜はりましたから義盛、歸つて之を納繪に物語りませと納繪は
之を聴きまして納繪、妾は木曾殿の妾たりしもの貞婦は兩夫
に見ゆとどか申し候へば、此儀ばかりは宥させ給へと言ふ和田
も尤どは思ひましたが義盛、吾とても強ち御身の色香に溺れ
たりと云ふにはあらず唯だ御身如き勇婦の暇より出生せしめ
たる子は、稀代の勇者であらうと、さてころ君に懇望に及び、君よ
り吾に賜はりしものとすれば狂げて承引して給はれと押返して
言ひました、納繪は雲時呻吟じて、さらば妾に御願の筋有之候、實
は妾は先頃より木曾殿の御願を宿し居り、一度は聞より聞へど
悟覺を極めて候へども、唯今の仰を承り武士と見込んでの御願

例卒みれなる御胤産み落せし上は、織した男子にもあれ、女子に
もあれ、養ひ取つて御自分の御子として下さるまじきや、是ぞ
妾が身に換へての御願……… 義盛、うれからば尙更重疊我れに
於いて、も委細承知。是から上總朝夷郡小林の郷へ連れて参り
此處で安産を待ちました、が時來つて産み落しましたのが男子
之を朝丸と名づけました、然るに産れてから三歳迄這ふも
出来なければ立つも出来ず、口さへ利くもどが出来ません
で、唯ビイノ、ノ、ノ、泣いてばかり居ります、イヤモク仕様の無
い子供で御座いますから、義盛も、嗚呼、可かぬものだ、義仲の胤に
て、腹は納繪種子も畑も申し分が、ないが陽氣の爲か、唐瓜の碌兒
が出来て了つた。と、大きに失望を致しまして、此兒は、逆も武士に
はなれまいから、父の菩提の爲め、出家遁世をさせた方が宜から
う。といふので、俱利伽羅丸と云ふ太刀を添へて納繪に、此事を申

朝 夷 三 郎

出でますと柄繪は如何にも之を残念に心得しと見え其太刀を
以つて自殺をして相果てました其魂魄が朝丸に乗移つたもの
か其後は全然打つて變つて遂に大力無双の勇士と生ひ立つに
至りましたが此朝丸上總の朝夷郡の小林の郷に生れしが故に
小林の朝夷とも云ひ和田の三男なればとて更らに之を三郎義
秀とも呼びましたさて此の朝夷三郎義秀が今一千五百餘人の
同勢を引連れて南追手鐵御門へ来て見ますと門を堅く閉ざし
て中に足利上總介の同勢三千餘人射手を揃へて散々に射掛
ける矢先宛がら村雨の板屋を打つに異ならず遠が三浦の死を
極めたる軍勢も此箭先に進み得て立縮んで見えたるにぞ義秀
大音揚げて呼ばりけるは「ヤオレ方々味方は後詰なき兵なれば
必ず無謀の戦して漫りに人数を損じ給ふこと勿れ此門義秀が
打破らむに何の手間暇いらざるぞと軍勢を後とに退かせ已れ一

朝 夷 三 郎

人眞先に進んだる其扮装瑠璃紺の鎧を一着かし兜は着せ
亂髪に綾を疊んで鉢巻を爲し右手には目方三十貫目長さは一
丈もありなんと云ふ鐵の棒を抱込み左手には三人持の大楯を
差弱し敵より射薙ける篠突くばかりの矢を物どもせ馬を煽
つて進みまして御門間近に乗附けヒツリ馬より飛び下りて見上
ぐれば強ち鐵の筒作りたる門と云ふにはあらねど厚樫の板を
以つて造り鐵の筒鐵を入れたる見るから嚴密な門で御座いま
す遙か後の方へ扣へたる同勢の者共は朝夷殿如何にして此門
を破ふるやらんと見て居りますと義秀は門の構造に目を配り
持ちたる鐵材棒を逆に押し取り大喝一聲するよと見えしが細柄
の方を門の土臺石の根方の所へ「エイズン」と突込みました所
が恐ろしや其棒が半ばまで大地へズブッと突立つたさうで
す豪い力もあつたもので地固杯を致しまずに丸太を地へ打込

第三十回

みますが多勢掛つて、エンヤラサアと掛聲で突きましても
 幸と二寸か三寸より這入るものでは御座いません、それを朝夷
 は一丈もありませんと云ふ鐵材棒を半ばまで大地へ突込んだと
 云ふのでびすから實に恐ろしい譯のもので御座います

斯くて朝夷は、エイヤツと突込んだる棒を一割り割り立て二度
 三度四度五度と抉つて居る中に石の根方の所へ大きな穴を明
 けて了ひましたらうみで義秀鐵材棒を傍らへ抛棄て土臺石に手
 を掛けてウ、ンと力を籠めて其明けた穴の中へ引摺込んで了つ
 た土臺になつて居る石が穴に轉げ込んだから門の柱がズドン
 と下がつて歪になりました義秀其門の柱へ手を掛け「アリヤリ
 ヤ」
 一と門が内へ傾いて參る様子城内の兵士驚いたの驚かさいの

と言つて「ソリヤころ一大事敵が門を壊はすぞ門を破るワと多
 勢門に搦つて「エイサツサ」カイヤツサ」と城内から押返
 す其時には義秀は手を放して態と黙つて見て居る中に居る奴
 は外で押して居ると思つて無闇に押返したから今度は外の方
 へ少し傾いて參つたので「ヤツ是れは可かぬ外へ倒した日には
 何にもおらぬと城内の者が手を扣へた時には又義秀が「ウ、ン
 と押して往くソレツ押しして來たと云ふので中から又押返す、マ
 ア内外から門を揺り壊はすやうなもので最早十分に土臺が弛
 みたるを見澄し義秀總身の力を両腕に籠めて「無弓矢八幡
 も照覽あれ……」エイツと叫んで勢一杯に押ししましたから何
 堪らむさし堅固の鐵御門もメリ」
 講談もあつたもんでげす此メリ」
 と云ふのは木が摧け

朝 夷 三 郎

ます音ドロくくくと云ふのは家根が落ちますのでミッく
くくと云ふのは門の柱の土盤が折れる音キユーと云ふのは門の
ベッチャッカと云ふのは門の倒れる音キユーと云ふのは門の
下に這入つて押しに打たれて死した奴の聲色で御座います其
様かみとまで委しく申上げませんでも宜しう御座います其
門の下に押しに打たれて眼球がボンと飛び出し血を滾々
と吐いて即死致せし者其數を知らぬ中には其眼球を拾つて珠
數や緒べに致した奴もあつたさうでげすがろれば餘り當には
ありません此驚くべき状況に城内の兵士ドロにふつて見
たる折義秀離れたる駒にヒラリと打跨がり鐵材棒を抱込んで
後方を見返り義秀何如に味方の人々戦ひは最早勝ちあるぞ
此圖を外さず乗込んで敵を一撃に破られよ進め進めと下知を
傳へながら韋駄天の如くに乘込みました一千五百の同勢もッ

朝 夷 三 郎

レッ大將義秀殿を討たすなと呼はりつゝ、吾後れじと乗込みく
四方八面に打蒐かる其勢宛然人間の火箭かと思はるゝばかり
皆死を決しての奮激な戦中にも朝夷義秀は彼の鐵材棒を打振
りく一擲りに十人二擲りに二十人三擲りに五十人四擲りに
百人とバラリく一撃ち立てますが此棒を喰つた者は皆黒血
を吐いて即死を爲し假令棒に當らずとも其煽りの風を喰へば
五六間宛向ふへブーンと飛んで行つたさうでげすから足
れではナカく敵ふものでは御座いません此激しき突撃に足
利上總介の同勢は愈が上にも崩れ立つたるを上總介見るより
大いに憤り上總ヤア物々しき敵の振舞か吾君命に依りて
此手を預り斯打破られ何の面目あつて人に命を台さるべきイ
デく義秀を討取つて呉れんづと言ひざまに馬を煽つて乗出
したる其扮装は白緋を市松に緘したる鎧に四方白の兜を眞額

に戴き、蛙巻したる薙刀を押し取り、義秀の馬前、近く進寄り、上總朝夷義秀殿に見参せむ。足利上總介此場に候ぞと、大音に呼はり、右の薙刀を薙短かに押取つて、身構へたり。義秀之を見るよは、義秀オ、面白し。足利上總介イデ、義秀が此棒を美事受けて見られよと、大喝一聲打込めば、上總介心得たりと、馬を左へ乗違へ空を打れせて、薙刀を取直し、ヤツとばかり掃ひ来るを、義秀遣は仕損じたりと、棒を急に取直しが、ツチリ之を受止めたり。互ひに手練の早業なれば、前に在るかと思へば、忽ち後へ廻り、後ろにあるかと思へば、前に廻り、陰に閉ぢては、陽に開き一往一來一上一下馬を巴の如くに乗廻し、火花を散らして、五十餘合も、飛いたるが、更らに勝負を決せず、殊に足利は馬術の名人なれば、千變万化に馬を乗廻し、宛がら、手足を働かすが、如く、追がの義秀も、走しきば、かゝりなれば、義秀此野郎能く、チヨコくする。奴だ

此奴は何でも取掴へて了ふに、如かずと心得たから、上總介が薙刀を以つて、掃ふて来るやつを、棒を取直して、カツチリ受け止め、おがら馬を進めて、寄るよと見えしが、持つたる棒を投げ捨て、上總介の鎧の袖へ手を掛けて、義秀ウ、ムと手許へ引付け、捕へやうとした時に、上總介も同じく、薙刀を投げ捨て、差添に手が掛るが、早い、か、閃乎と引抜き、義秀目懸けて、突荒ると思ひ、きや、己れが着たる鎧の袖を、ブツリと切つて、放ち、ヤツと一聲掛けて、馬上ながら、掘の向ふへ、フイと飛び越し、向ふ岸に立つたる松の枝に取付いた。其早業、猿の如く、遠がの義秀も、アツと後へ退歩いて、少時、呆然として居りました。之を見たる者、敵味方どかく切つたりや、な、飛んだりや、かゝり、と、聲を揚げて、感歎致しました。

第三十一回

ろゝで、足利上總介は、其儘、人數を纏めて、其處を引上げましたか。

ら此南追手鐵御門は到頭朝夷が乗取りまして、うれより中の御門へ進みまずと、此處を固めたるは三浦平六兵衛義村にて、己が軍勢と足利上總介の敗兵とを合し必死となつて朝夷の手を喰止めんと致しましたたが奈何せん朝夷の勢激しくして此處をも破らるゝみさゝかりたした、そこで御所へ此事を櫛の齒を挽くが如くに注進致しましたから、大江の廣元が將軍此處に御座ありては心許なく存じ奉る、早々北の御所石の坪へ御引上あらせられ北條殿を御名代として此處に御止め遊ばさるゝやうと慥う申上げましたのは、廣元は和田の心を能く存じて居りますから將軍此處に在しては和田も十分に攻むるゝとが出来づ且つは若し過つて其兵の爲めに君公を傷け奉るやうの事ありては相成らじと斯う心付きましたので御座います義時は君に離れて心許なく大いに我身を氣問ひましたたが據る御座いません將

軍は非常御門より御輿の儘にて御出でにあり大江廣元僅少の御伴にて之を警護を致し鎌倉雪の下の間道へ差掛りますと此處には和田方の勢が潜んで居りまして、須破るう敵兵是れに遅れ來つたり、ソレツ逃かすな遣るゝと對つて参りましたから大江廣元真先きに駆出で 廣元「這は狼藉かり、過ちを致されど是は將軍家にて大江廣元斯く御伴致せり、敵對は無禮あるぞ、頻りに制しましたたが和田の勢の先きへ進んだる血氣の者共之を耳にも懸け申撃つて蒐るに廣元も制し兼ね 廣元「儲は義盛眞實謀叛を企てしならむか。茲に疑を生じましたから據なく此處にも戦を開きましたた、夜が明けてから此事を和田義盛が知つて吃驚致しましたたが、既早義盛が君公へ敵對致せしといふとは八方に知れて了ひました、鎌倉を遠巻に致したる近國の大名は眞逆和田に謀叛の心はあるまじと思ひ鎌倉内へは兵を進め

兼ねて居りましたが、愈々和田の同勢將軍へ御敵對を致したと云ふふと聞きまして、さらば打捨難し、いざ和田の同勢を討取つて君公の御難を救ひ奉れ、と八方より乘込來つて和田勢を圍み、及を向けたら、義盛天を仰いて歎息し、義盛我が兵過つて君公に及ぶを向けたるは、既早悔むも詮なし、是れ吾家の滅する時節來れるあり、されば今茲に戰を續くるも無益あり、無益の戦ひは爲すべからず、ソレツ同勢を引上げよ、と云ふので一族一統悉く其兵を引上げて前濱と云ふ處へ集まり、此處に一同自殺を爲して相果てました、却説又た朝夷三郎は南追手鐵御門を撃破り、二の廓へ進み、三浦平六兵衛の同勢を撃破り、今や北條の方へ、蒐らむとする所へ、和田の一族謀叛の本相現れて、近國の大名の爲めに包み撃たれ、前濱に退いて皆々切腹を致したりと云ふ知らせがあり、ましたから、義秀無念の切齒を爲し、義秀エ、一情なや

吾が一族の赤誠を天道遂に見捨て給ひしか、此上からは是非もなし、是より敵中へ斬込み斬つて、斬りまくり思ふ存分の働させし上にて、父上の御伴せんと討死の決心にて、尙も荒れに荒れて敵中に乘込まん、と爲すを其の恩從齋藤源藤吾秀方、馬の轡を確乎と取り、秀方我君逸り給ふは御尤もに候らへども、今此處に戰死を遂げられなば、御父上修羅の妄執は誰か之を晴し參らすべき、縦令御命は惜からず候とも、一先づ此處を御落ち遊ばされ、静かに謀器を廻らし給ひて、彼の北條を討ち御父上並に三浦一族の志を成さば、泉下の御父上を始め一族の喜び此上をか、るべしと存じ候、生は難く死は易し、必ず御短慮あるな、一先づ此處を御通れあれ、と切りに諫めましたので、義秀も實に道理あり、と首肯し、遂に兩人危くも鎌倉の戰地を脱れ、安房の國へ落ちまして、後在柄の平太胤長に一味を致せし信濃國小諸の住人泉

朝 夷 三 郎

て確乎と眠んだから漁師探へ上つて了つた。〇「マア、待つて呉んか、旦那、私の方ぢやア知らねエぢやけん、お前さんの方で名乗るから悪いだ、何も私等の方で名前を聞かうと言ふたぢやねエぢやアね旦那、マア、少し待つて呉んされよウ……」
と云ふ中に八郎と云ふ漁師が八郎「ア旦那方、少しマア勘辨をして下せエまし、最前からお前さんの言ふは、亦た一理屈あるでのウ、川師は川を果てる船乗は海で死ぬ……漁師は海で死ぬ、生どしなければならぬエ所だ宜うが、んす海濱きを氷の上を浮いて居る船で行かれねエと云ふ理屈もねエからマアどうにかして一つ行くふどにしやんせう、今此處でお前さんに打殺ろされるよりやア行く方が宜いだぢやアア行くふど、極めませう、げれども旦那今夜の風ぢやア此船を出すことは出来やせん

朝 夷 三 郎

せ、此風が明日の朝になると追手になる逆風では船は出せやせんから旦那方マア明日の朝までお待ちませエまし、明日になつて追手に帆を上げて一つ押走つて見べし、義秀、ウム、然うか船を出して呉れさへすれば宜いのぢや、併し明日の朝まで吾々共は何と致さう此處に一夜を明さうか、八郎「ナア、私家は直に此先きでがすから私の家に来て一夜を明しなせエ、竹の柱に茅の屋根、進げるものもがアせんが、手造りの諸白に磯の雑魚煮、麦飯位はあるだアから私の家に来て一夜を明かさつしやつて、明日の朝追風が吹いたら一つ押走るふどにし、義秀、うれは忝けない、然らば漁師其方に万事を托すを宜しむに計らへ八郎「ハイ宜しうが、んす直ぐと御座らつせへ、皆がも来るが宜い、と此者は兄哥株と見なしまして他の漁師と共に朝夷源藤五の兩人を作ひ己か苦屋に参りました

八郎「サア、マア此方(こゝ)に上がらつせへ、皆(みな)ながも上(あ)れよ、焚(た)火(び)でもし
て温(ぬ)るべい……」さうだのう旦那(だんな)方(かた)ア諸(もろ)白(はく)飲(の)むるか、義(ぎ)秀(しゆ)忝(かたじけ)
ない、諸(もろ)白(はく)は好(こう)物(ぶつ)であるから、では一(いち)杯(ぱい)馳(ち)走(そう)に預(あ)からうか……」
八郎「ア、宜(よろ)うがんです。磯(いそ)の雜(ざ)魚(ぎよ)煮(に)に手(て)造(ぞう)りの諸(もろ)白(はく)を、出(だ)し、八郎(はちろう)
サア好(こう)けりやア澤(さわ)山(さん)食(く)らつせへ。と言(い)ふ儘(まま)に義(ぎ)秀(しゆ)源(げん)藤(とう)五(ご)の両(りやう)人(にん)
鎌(かま)倉(くら)の戦(いくさ)地(ぢ)を脱(だ)れてから未(いま)だ悠(ゆう)々(々)と食(く)事(じ)も致(いた)さぬ事(こと)故(ゆゑ)、餓(う)ゑた
る時(とき)は食(く)を撰(せん)ばずとやら、其(その)諸(もろ)白(はく)に舌(した)打(うち)鳴(な)らして、義(ぎ)秀(しゆ)「ア、甘(かん)
露(ろ)々(々)好(こう)い心(こゝろ)持(も)ちになつた。八郎(はちろう)さうだの旦那(だんな)方(かた)麥(むぎ)飯(い)を食(く)ふ
かのウ、義(ぎ)秀(しゆ)麥(むぎ)飯(い)か結(むす)搦(な)ぢや。八郎(はちろう)ぢやア麥(むぎ)飯(い)をやりあさる
が宜(よろ)い、ぞれ己(おれ)が給(たま)仕(じ)してやるべい。義(ぎ)秀(しゆ)「イヤ、決(けつ)して搦(な)ぢ
ふて呉(く)るゑ。と手(て)盛(もり)八(はち)杯(ぱい)と云(い)ふので義(ぎ)秀(しゆ)と源(げん)藤(とう)五(ご)盛(もり)つては食(く)ひ
盛(もり)つては食(く)ひ、両(りやう)人(にん)して五(ご)十(じゅう)六(ろく)杯(ぱい)能(よ)くもマア食(く)ひ込(こ)んだもので

御(ご)座(ざ)います、サア諸(もろ)白(はく)は廻(まわ)つて來(き)るゑ腹(はら)は脹(は)れるゑ腹(はら)の皮(かわ)が突(つ)
張(は)つて參(ま)ると眼(め)の皮(かわ)が撓(た)んで參(ま)るゑ段(だん)々(々)と眠(ね)氣(き)を覺(おぼ)え、コ
ックワ、坐(ま)眠(ね)をして居(ゐ)りますから八郎(はちろう)め、前(まへ)さん方(かた)坐(ま)眠(ね)つ
て居(ゐ)たつて無(む)駄(だ)な話(わ)だ、明(あ)日(じつ)の朝(あ)追(お)風(かぜ)が吹(ふ)いたら、私(わたくし)等(ら)が起(お)して
進(すす)めるから横(よこ)になつて寐(ね)さつしやるが宜(よろ)い。義(ぎ)秀(しゆ)然(しか)ば大(おほ)分(ぶん)
疲(つか)れが、出(で)たやうな、さらば漁(り)師(し)頼(たの)むぞよ、と豪(ごう)膽(たん)にも義(ぎ)秀(しゆ)源(げん)藤(とう)五(ご)
の両(りやう)人(にん)圍(い)城(じやう)の端(はた)に倒(た)れ、好(こう)い心(こゝろ)持(も)ちでクウ、と云(い)ふ高(たか)朝(あ)之(の)を見(み)
て傍(わき)に居(ゐ)りましたる漁(り)師(し)が聲(こゑ)を潜(ひそ)め、〇、コレ兄(あ)哥(が)、お前(まへ)マア一(い)
寸(すん)遣(や)れぢやアあらうけれ、詰(つ)らねエ、とを言(い)つて此(こゝ)人(ひと)達(たち)を此(こゝ)
家(か)に連(つ)れて來(き)て、明(あ)日(じつ)の朝(あ)追(お)風(かぜ)が吹(ふ)いたつて、彼(か)の船(ふね)で薩(さつ)摩(ま)にや
れるものぢやねエ、馬(ば)鹿(か)氣(き)た、とを言(い)ふたものぢやアねエ、かナ
さうする積(つ)りなんだエ、オ、オ……」八郎(はちろう)黙(だま)つて居(ゐ)ろ、と量(り)見(み)あつ
て、恚(いら)うしたんだ、豫(よ)ねて御(ご)領(りやう)守(しゆ)の東(とう)條(じょう)五(ご)郎(らう)様(さま)の御(ご)下(げ)知(ち)として鎌(かま)

倉の落人に見たならば必ず訴人せいで、後美の金は望みぬ、第と言はしつた、雉子も鳴かば射たれ、ねえと云ふ警の通り、己らの方ぢやア知らねエのを己が口から鎌倉の落人だと吐かしやアかのたのが運の盡き、直ぐ取捕まへやうとも思つたが、見れば此方の手心には及びさうもねエ奴だから、甘々騙して此家へ引摺込んで、諸白や飯の馳走でグツスリと懲う寝轉がして置いたからにやア容易に覺る氣遣ねエ是から御領守へ此事を訴人して、タツアリ御褒美に預らうと懲う云ふ己れの策かんだ。○成程兄哥は兄哥丈豪れえ事を考へたの、うれぢやア直ぐに御領守へ訴人して來させエな、己達は此處に番をして居やうから……八郎さうか、うれぢやア一と走り己が訴人をして來るから、万一此奴們が眼を覺醒したら復た酒でも飲はして酔はせて置けよと罷引誘ぎて漁師八郎早速領守東條五郎に之を告げに往きました

此東條五郎と申す奴は北條に詔ひふ髭の塵を拂ふ倭奸なる奴で御座いますから、八郎の注進を聞くよりソレヲ落人を召捕れど五百人を引卒し自身馬に鞭つて乗込來り裏と表の兩面より二百五十人宛手分を致して一度にドツと押込まんぞ致しまし、たが勇士は善の音にも眼を覺醒すと云ふ諺の通り、寐入つて居りました、義秀源藤五の兩人は物音にハツと眼を開いて立上りしが、義秀、什麼源藤五、當家もう胡亂ふれ、油断すおと言はれて源藤五も心得て候、御主君にも御油断なく……と身構を致して居る所へ、落人逃がすな召捕れ。とドツと一度に押込まんぞする様子あれば源藤五は裏手へ義秀は表の方へと飛出し、義秀命知らずの雲儕奴們と片端から運葉擲りに金材棒を把つて擲り散らしたる其手並に怖ぢ恐て捕手の人數パツと四方に散亂するを見るより東條五郎大音揚げ、五郎手に餘らば討止めよ、討

朝 夷 三 郎

てよく。と下知をさす所へ、義秀韋駄天の如く走り來つて馬前に突立ち、義秀、ヤオレ汝、北條に詣ひ忠義無二の武士を召捕らむとする悪漢奴、天に代つて朝夷が誅戮する覺悟せよ。と金材棒を把直し頭上を目懸けて撃つて蒐るを東條五郎、心得へたり。と扨止めやうと致したが、少しばかり心得方が遅かつたと思へて、ガアンと天窓を打撃されましたから、野郎頭顔がグヅグヅにちつて、キューッ。とろれッ切りにあつて了ひました。誠に意氣地のない奴で……、大將既に此くの通りで御座いますから、殘餘の者一人も殘らず風木葉の散るが如くムラッ。と逃去りました。後に義秀源藤五の兩人は互に顔を見合せて、源藤五「御主君、先づは御無事で……」義秀「汝も無事で先づは重疊最早や此地へ斯うしても居られまい、其場に繋ぎある船に打乗り何地へなりとも渡らむ。と磯屋を出で、繋ぎし船へヒラリと乗移り朝

朝 夷 三 郎

夷は金材棒を以つて漕ぎ源藤五も權を把つてグイッ漕ぎます。此邊は遠淺で御座いますから、好い楪梅式に二町程は先きに出たが、段々深くなつて参りましたから、義秀源藤五、乃公の棒はモウ届かぬやうにあつた。源藤五「私の權もモウ立ちません。義秀、ア、船が掛つて居るやうだから、船を押して見ろ、其船を……源藤五「宜しう御座います。と言つて源藤五が船杭に濕しを呉れ、船繩を掛けて押さうと致したが、ナカッ。素人に旨く漕げる譯のものでは御座いません、ゴロッ。船は外れる、船はクルッ。旋廻りしますから朝秀も弱り切つて、義秀「コレ源藤五、さう船を旋廻してはいかんよ。源藤五「旋廻すまいと思ふんですけれど、旋廻するんですから仕方が御座いません。義秀「どう致したら宜からうかなア。源藤五「仕様が御座いませんから、是れは逆はぬ方が宜しう御座います。義秀「何故ぢや。源藤五「旋廻る船には逆は……

..... 義秀源藤五、それは獨樂の事たわい、どうも弱つたなど道
がの兩人も困じ果て、なか〜 洒落所の騒では御座いませぬ

第三十四回

すると沖の方から、「ヨイト.....ヨイト」と聲を掛けながら船を漕
いで来た者が御座いました。がピタリと船を止めて、「ア、誰
だよオ、其處で船を旋廻して居るのは誰だよオ、暗處で船を旋廻
して物騒ぢやねエかのウ、危いぞ誰だよオ.....」 義秀「ア、漁師か
好い所て来て呉れた其船を此方へ着ける.....」 其船を着けて呉
れ.....へ、「マア〜」 持ち合せいよ今己れか船を着けてやるべ
エ船縁に手を出すと危いぞと言ひながら此方へ船を漕ぎ寄せ
ました。△「サア宜いかい 義秀「ヤ、忝けかい吾々兩人を其船に
乗せて呉れ △「己れの船に乗つてどうするだア 義秀「其船を薩摩へ渡せよ △「戯言ウ言
薩摩へ渡せ △「エ、 義秀「其船を薩摩へ渡せよ △「戯言ウ言

はねエもんだ此船がどうして薩摩あんにぞに行かれるものぢや
ア、ぬいろれぢや己れの地方に着けてやらう安房の方に.....
義秀「安房の方にやられて堪るものか 義「何故いけぬエだア
義秀「吾々兩人は今安房の國の領守東條五郎を殺して来たの
ぢや 義「ヤア、途方もねエ事をしなすつたかアそれぢやア己
れの船杯に乗せて連累になつちやア宜くねエサア〜 己れの
船に乗つてはいけねエ他の船に行きなせへ.....サア他の船に
行きなせエよ 義秀「其方斷つて此船を他にやらぬと云ふなら
ば此處で命を取らざるだ △「何だぞ..... 義秀「此船を斷つ
て漕いで行かんと命を取ると云ふのぢや △「黙れエ小生意氣
を言を吐きやアがつて他人は知らねエこと此乃公様に對つて
其様小生意氣を言を吐きやアがらんと擲殺すぞ野郎..... 義秀「
何ぢやと..... △「コレ己れを知らねエか此安房の國で青竹の

沖八と言つちやア知らねエ者はねい青竹と云ふ緋名を取つたのは青竹をギューとッゴいて鉢巻にするつてへ所から人に緋名をされたのぢや其の乃公様に洒落た言を吐きやアがるど己等二人共打殺して海の中に敵込むからさう思へ源藤五之を聴いて源藤五「ア言はせて置けば好い氣になつて憎い雑言敵して措かぬぞと大刀の(ツカ)に手を掛るを義秀「マア〜待て……と義秀源藤五を止めて置いて沖八に對ひ義秀「コレ下郎沖八「何だ吐物だど穢ねエみどを吐きやアがるな何の用だア……義秀其方は此安房の生れか沖八「イ、ヤ己らア生國は上總だ義秀上總は何地だ沖八「朝夷郡の生れだ義秀「ナニ汝は朝夷郡の生れな……うれは頼母い領守和田左衛門尉義盛の三男に朝夷三郎義秀と云ふ者のあるを存じ居るか沖八「さうよ己が御領守様の御子息様で朝夷郡で生れた豪い力のある坊様があ

ると云ふふとは聞いて居るがそれがさうした義秀其朝夷三郎義秀は乃公ぢや沖八「何だど此若造戯言べえ吐きやアがつて其様を言を聴いてハアさうでござエますかつて眞實に思ふ奴があるものか朝夷様ださんど何の證據もなくつて洒落た言を吐きやアがるか……義秀「唯だ云ふたばかりでは疑ぐるのは道理ぢや別に證據とてはなけれども我が所持する此金材棒之を汝が持ち試みなば我が朝夷あるみどを知るであらうサア之を持つて見よと沖八「目先へ彼の鐵材棒を突付けますと沖八「何だ這座棒位持てねへ奴があるもんかと言ひながらグイと引綱で沖八「ウム……ウム……ありやアさうも重いなアぢやアお前様之を持つて來なすつたのかい義秀「如何にも沖八「さうして又這座處へ來なすつただア義秀「實は鎌倉の戦地を連れて上總より安房に渡り今安房の領守東條五郎を打殺し

て此船に乗り此處に参つたのぢや 沖八「アムそれぢやア眞
 實の朝夷様に逢まねエ分つた」うれぢやア己れも是から御
 伴すべエマア「宜いワ悠りと咄すべエ時に朝夷様も前様に
 少し頼むゝとがある己れエお前様の乾兒にして呉れるか 義
 秀「何ぢや……」 沖八「乾兒にして呉れるかよオ 義秀「乾兒……」
 ハ、家來にふりたいたいぞ申すのか 沖八「家來でも何でも構は
 ねエお前様の手に附いて行させエすりやア宜いだア 義秀「可
 し」承知して取らず 沖八「ぢや是から薩摩に渡つてごうす
 るんだね 義秀「薩摩へ渡つて人数を借受け再び鎌倉に乗込ん
 で亡父の吊戦を致すのぢや 沖八「ヤヨ戦をするのかねぢやア
 戦の時にお前様に附随て行きやア甚麼に先方の奴を殺ろして
 も下手人にやアとられぬエなア 義秀「戦に行つて人を殺して
 下手人にどらるゝ者はない 沖八「さうかなアうれはマア有難

てエぢやか己れも一遍人を殺ろして見てエと思つて居たが人
 を殺ろすと下手人にどられて殺ろされると云ふから自分が死
 んぢやア詰らぬエと思つて溫柔しくして居たけれど下手人に
 とられぬエで人が殺ろせりやア這面面白いことばねエ、うれは
 さうと此船は風委せにして置くより仕様がぬエとして這度
 小つつけへ船で薩摩へ渡ることば出來ぬエが其中に親船が通る
 だらうさうしたら其親船を奪掠つて親船にやア水夫楫取が揃
 つて居るから其船で以つて薩摩へ渡つて人数を借受けると云
 ふゝとにしやうし若し其親船が見當らぬ中に恐るゝ風でも喰
 つて此船が轉覆つたらお前様も已れも運のねエ所と諦めねエ
 マア此船は風委せにして置くだア 義秀「ウム至極宜しからう
 何が宜いことがあるもんで置か義秀も苦紛れに万事沖八に願
 みましたのです沖八「心得て船に帆を上げ風に委せて走りまし

たが下田の側手に於いて親船が一艘風待を致して居るのを見
出し之れに斬込んで圖らず彼の船長の企謀に預りし信濃國の
住人泉小次郎親衡に對面の件次回に譲ります

第三十五回

然る程に義秀源藤五沖八の三人は到底此船では薩摩へ渡れぬ
から先づ兎も角も船を風任せにして置いて其中に親船が見當
つたら其船を奪ひ之を以つて薩摩へ渡らうと相談が極り後
致して居る中に早や東の方白んで参りましたから沖八サ
ア親分モウ東が白んだ此搦梅では追風が吹いて来るであ
らうと言ふて居る中に追風が果してろよと吹いて参りま
したから沖八ソレ占めたぞ追風が吹いて来たドレ帆を揚げ
ベエと蒲帆を押立てますと船は段々沖を指して走しつて参る
沖八どうだお親分己の酒の飲餘りがあるが己アマア澤山だか

らお前さん方飲みあさるなら飲むが宜い 義秀うれは忝けな
いでは馳走にあらうか 沖八生憎下物が無いが宜い丈飲みな
せエ源藤五朝夷の兩人は沖八が飲餘りの酒を飲み好い心持に
なつて昨夜からの疲も御座いますから板子を枕に致して兩人
ゴロリと横にゑるど其儘前後も知らずグクと云ふ高聲
沖八マヂリと致して起きて居りましたが 沖八イヤ二人ど
も能く寝さつしやれたなア此船は風任せにして置くのだから
面能も取能もねエだナ面能も取能もねエの己が斯うやつて
ボカリと起きて居た所が用もなしと昨夜徹夜をして居るか
ら少し眠気も差して来たやうだ己もハアと寝入りやるベエ
かど亂暴な奴もあつたもので御座います帆を揚げつ放してゴ
ロリ寝ますと是れも其儘高聲船は風のまに波みのうね
彼方此方と漂ふて居ります中に徐く風の身に染みて寒

さを覺ねたる沖八がバツチリ眼を覺醒し 沖八「ア、寒い……」
イヤ、眞暗だぞ、己ア未だ船の上お居るんだな、船と云ふもの
は何人が工風をしたか知んねエが旨く出来て居るものだぞ、容
易には轉覆らねエを、うればさうど何處に着いただ、着いた處が
分んねエ、眞暗ではあるし西も東も方角が分んねエ、どうも困つ
た……オ、二人ども未だ能く寤てござらしやるワ、餘程眠いと
見ねるな……ハアア此處は何處だんべエと暗中を透して彼方
此方を見廻はして居りましたが、其中に何方か見ねて薄明る
くおつて来ましたから 沖八「ヤ、ふりや夜明けに間短くなつた
かお、待アてよ……」夜が明けから帆を揚げて押走つてくれか
ら寝たんだぞ、うれが又暗い所から明るくなつて来るんで見る
ど一日一晩寝ちやつたかお、事に依つたら二日二晩寝たんだか
も分らねエ……虎の遠吠でもするやうな處にでも吹着けられ

て来やアしねエか知ら……ど何氣なく左の方を見ますと、一羽
の親船が馬待を致して居ります、沖八之を見らんと 沖八「締めた
ぞ先アづ有難てエ、此親船を己が方に奪つて此船で薩摩へ渡る
べエ、待てよ……」朝夷様も源藤五様も能く寝て居さつしやるな
ぢやア一番己が一人で之を奪つて目覺しにしてやるべエと、藤
帆をバツチリと疊んで了ひ船を掛けて件の親船に漕寄せ先方
の船へガツチリ繋い、ノソソ、其親船に上がつて参り船のセヨ
の方を見ますと、暗う御座います、酒を飲み大聲で何やら話を致して居
けて多勢が車座になつて酒を飲み大聲で何やら話を致して居
る様子 沖八「ハテ何たらふ此船は……」米が積んであるじや
し酒が積んであるじやあし、油も積んでなし材木も積んでなし
何だかありア分らねエ、が何しろグツスリ寝て起きたばかり
で腹が減つてならねエ、腹が減つて居ちやア十分の儘きも出来

朝 夷 三 郎

ねエが、ヤア旨さうに飲んで居やアがるを、酒の匂いが鼻に
に這入つちやア堪らねエ、先づマア一杯御馳走になつて、それか
ら後の事だ、マア彼處で一杯飲むべエ。と獨言を言ひながらノコ
く其處にやつて参り、突然に後から 沖八「お早うござえます
と聲を掛けられたから多勢の者は吃驚して振り返り ○何でエ突然
に……吃驚りさせやがつた、ソイを見たるどのねエ奴だが、手前
何處から來やアがつた 沖八「へエ…… ○何處から來たんだ
つてエふとよ 沖八「私かね……私には安房の國の者だアよ ○
安房の者だ……安房の者が何で這麼處ろに來やアがつたんだ
沖八「私は漁師だがのウ、漁に出で帆を揚げて押走つた、が、餘り
眠氣が差したからコロコロ轉がつてろれッ切り今までハア眠て
了つた、ア、今漸う眼が覺めて起きた所が、何處の果ての陸
へ着いたか些とも方角が分らねエ、うれからマアお前様方の船

朝 夷 三 郎

に乗つたら様子を知れぬと思つて這入つて來た、が、此處は
何地だんべエ ○亂暴を奴だを帆を揚げ放して睡て了ふ奴
があるかい、此處は伊豆の下田沖だ 沖八「エ、伊豆の下田の沖
だ……ハアさうかねエ、まだろれぢやア日本の中だな ○當
前よ 沖八「己アハア虎の遠吠でもするやうな處に吹着けられ
やしないかと思つただ、先づマア下田沖と聞いちやア有難てエ
が何しろハア腹が飢つて仕様がねエでなア、誠に濟まねエ、ん
だけれど、さうかハア己の頼みを聽いて呉れ ○何だ 沖八「腹
が飢つて仕様がねエだが、其酒を一杯飲ませて下せエな ○遠
慮のねエ奴だな……ぢやう仕方がねエ飲ませてやらう此處に
來ねエ 沖八「さうでがすか、うりやア有難うござえます、斯う禮
を言つて飲む日には一杯飲んで十杯飲んでも同じよ、たか
ら成丈私には餘計に御馳走にゑる積りだアよ、小つけへ物では

まだるいだ、大い物を渡して貰ひてエのウ、ア此井が宜い……此
井一杯注いで呉れ、モット注いで呉れねエか、客々するなよ。○
大層隠面のふい奴だを手前は……サア一杯注いでやつた。沖八「
ヤ、有難てエ。とグイと一呑に呑干して。沖八「ア、ア好い心持
だ……ア、復活たぞ、モウ一杯御馳走になるべい。○まだ飲ふ
か、ぢやアモウ一杯飲め。沖八「有難てエ、ア、旨エ〜ア、どう
も好いおア、立付三杯と云ふももあるから濟まねエけれどモ
ウ一杯御馳走して呉れ。

第三十六回

○恐ろしい飲ふ奴だぞ、ぢやアモウ一杯飲むか。沖八「有難てエ
……けれどもさう酒ばかり飲ませぬエ下物が前にあるやう
だ、其下物を取つて呉んな、客の接待は能くしねエぢやアなんね
エぞ、客々せず下物を此方に喰はせろ……○大變な奴が來

やアがつたな、マア仕方がねエ、サア此下物を喰ふが好い沖八「
ヤ有難てエ、ア、好い心持になつた、モウ此位にして止めにしべ
エ、餘り酔つばらふと働く事が出来ねエからな。○何を働くん
だ。沖八「ナ、此方のみんだから宜い。○手前モウ大概酒を
飲んだら船に歸つたが宜からうぜ。沖八「へエ有難うが、少し
お前様方に頼みがあるかのウ。○未だ頼みがあるか、何だ……
沖八「他の事でもねへけんご己が船はさうも小つけへ船でさう
するもども出来ねエだ。○手前の船が小せエので、さうするも
ども出来ねエのがさうしたんだ。沖八「薩摩に少し用があつて
渡らにやアおらねへだがナ。○ウム。沖八「其薩摩へ渡らうと
云ふにやア巨大な船が要るだ、うれにやアお前達の此船を氣の
毒だが買ふから其船で居て呉んなよ。○ナ、何だ。沖八「
ナニサ此船を己が買へに來た、濟まねへけんご此親船を買ふ

朝 夷 三 郎

からのウ……ヤレ大きに有難てエ誠にはやお氣の毒だがナ己
が此船は買つたぞ、大きに有難てエ……と斯うモウ禮を言つて
了つたからにやア己の船だ、斯うなりやアモウさう多勢揃つて
居ても仕方があるにやア、役に立つ奴は残つて役に立たぬエ奴は何處
かに行つて呉れ。○何だ、受けてやりやア好い氣になつて酒
を喰つてブウ、吐かしやアがる、大胆な奴だ、ソレツ追拂つ
て了へ。ど一聲掛けるど、轟乎立つた、二人の若者、沖八の右と左の
手を取つて、二人「ヤイ」手前が酒を飲み、エと云ふから飲
ませてやりやア好い氣になつて、管を巻きやアがる、頓でもねエ
ことを言ふ、野郎だ、サア野郎、足下の明るい内、トツトと歸りやが
れ。ど曳立てやうとする奴を、沖八何するだアよ、己が手杯を取
つてさうするだ、エ、煩惱え。ど左右の手でバラリ拂除けました
から、二人の若者は沖八の大方に拂はれてド、ド、ドと踏く途

朝 夷 三 郎

端海の中へ、洵乎と落込みました。○「ヤア此野郎胡亂な奴だ、ソ
レツ危えぞ、疊んで了へ。と言ふより早く一同が總立ちにあつた
様子、沖八之を見るとき、沖八此野郎己が船へ來やアがつて亂暴
をしやアがる、大胆な奴だ、片端から蓮葉振りにして呉れるから
覺悟をしろ。ど腰に挿んだ手拭を捻つて向鉢巻を爲し、船の方に
あつたる舵柄の棒を是究竟の得物と把上げて多勢が撃つて、蒐
る中に飛び込み力に任せてヒューン、と雄立てました、が、沖
八劍術は知りませぬ、が馬鹿力のある奴で、御座いますから、イ
此奴は手強い奴。ど一同持餘して居ります、其時、沖八の爲めに腰
骨を打破かれ、親船から真逆様に朝夷と源藤五が寝て居る船の
中へズンと落ちて來た奴がある、其物音に、兩人目を覺して見
ると、船は親船に繋がつて居りまして、親船の方ではワイ、と
云ふ騒ぎ、其中に「ヤア己が船だ」と呼ぶ聲は、確かに沖八で御

座いますから 義秀源藤五察する所吾々兩人が寝入つて居る
間に八が此親船を見當て、之れに乗込んだに違ひない、ソレ
ッ加勢を致して取らせい。と言はれて源藤五心得たり。と太刀引
抜いて飛上る、朝夷も鐵材棒を抱込んで親船へ飛移り 義秀、ソ
レ沖八加勢を致すぞ。とビュン、と件の鐵材棒を振廻はした
から沖八一人でも手に餘つて見たる所に重荷に小附け所
はない小附に重荷の兩人が飛込んで来たので、すから「這は敵は
じと水練に長けたる奴は皆ボカ、海の中へ飛込んで了ひま
した後どに残つてマゴつく奴を五六人生捕つて了ひ 沖八「モ
ウ親分宜うが、んす、お前様方御兩人に這度に働かせやうとは思
はるかつた、己がお前様の寝て居さつしやる間、奪つてやらう
と思つたが餘り騒動が大もんでお前様の眼を覺して誠にハア
手数を掛けて済まなかつた、此船を此方に奪つて好い塩梅に念

ひが届いた、斯うやつて水夫の奴を押へ付けて置きやア、此奴
們に船を動かさせることも出来たア、ヤイ奴們ア。と言はれて
生捕られた奴は一同に両手を支へて、どうが命だけは助けて
…… 沖八「可し、向は取らうとは言はねエ其代り汝等が後
で此船を自由に働かせねエぢやアあらねエぞ、可いか……、うれ
に全体此船は何を積込んで何處へ往く何人の船だ △此船は
賊船で御座います 沖八「賊船とは何だ △海賊の船で御座い
ます 沖八「海賊の船だ……、フーム己ア些ども氣が附かなかつ
たが泥棒が乗つて居る船か太胆ね奴們だ △其船を奪い
なされるのですから貴方方も餘り細くも御座いますまい 沖八「
何を吐きやアがるんだ……、頭領は船に居たか △頭領は此船
には居りません、此船は皆此組の者が預つて居りましたので……
沖八「フーム頭領と云ふのは何處に居るだ △今一艘此

汝等は何者にて何人の下知を受けて来りしぞ、速に姓名を名乗れ。と呼はるを義秀聽いて確乎と睨付け、義秀黙れ、汝國の制度を破り海中に漂泊ひ物奪を致す盜賊奴們、天に代つて誅伐するに仔細はない、人の姓名を尋ねるには先づ己れより名乗るべきに禮義も辨へざる奴輩か、尤も賊を働く者の禮なきは咎むるに足らぬ、吾先づ名乗つて聽かせむが、名前を聽いて驚く吾も、三男朝夷三郎義秀なり。と名乗りますと彼の頭領と見はし者はハツと驚後に飛退り、頭領は和田殿の御子息朝夷義秀殿にて候ひしか、然様ども存せず最前よりの無禮偏に御容赦下されよと身を退譲りたる有様を三郎不審氣に見遣り、義秀我が姓名を聞きしより、俄の退譲訝かし、して又汝は何者あるぞ、賊其か疑ひは御道理拙者は御身の一族在柄の平太胤長殿と一味爲し

北條義時を討たんと企圖し、信濃國小諸の住人泉小次郎親衛にて候ぞや。と名乗るを聽いて義秀も、偕ては御身は泉小次郎親衛なりしか、姓名は豫て聞及びしが、對面致すは今日が始めてなり、不思議ある對面か、親衛誠に不思議ある對面して、和田の御子息には如何なる事情にて斯る所へは在せしぞ。と問はれて、義秀坐に涙を浮べ、義秀物語を致すさへ、誠に遺憾の譯がら、父義盛、北條を討つて、天下の災を除かむと謀りしも、運拙くして事成らぬ、父を始め一族は前濱に於いて戦死に及び、拙者も俱々討死を思ひしが、是れなる源藤五が諫めに隨ひ、借しからぬ命を長らへしも、薩摩國へ押渡り人数を借りて、今一度鎌倉へ乗込んで北條を討ち、父が修羅の亡執を晴らし、一族一統の汚名を雪ぎ、天下に忠節を顯はさむ爲め、さりながら戦地を落ちし此方は何れを味方と頼まむ者も、既に安房の國にて危難に遭ひし

が此沖八の情けにて小船に乗りて其地を道れ風に任せて圖ら
きも此處下田の沖へ來り御身の船をも知らずして親船あらば
薩摩への渡海も心の儘からんと狼藉にも此船へ乗込み來りし
我胸中お察しあれ小次郎殿と涙ながらの物語聴いて驚く小次
郎親衛儲ては御父上にも然る思召あられしか知らぬ事とは云
ひながら其折御加勢も仕らす無念千万に候なり拙者事も御一
族荏柄の平太胤長殿へ一味おし北條を討たむと企てしが早く
も事露顯れて北條より兵を我旅宿へ向けられ吾をも搦め取ら
むと爲せしにより其同勢を撃拂ひ辛くも故郷信濃に立歸り候
ひしが早や隣國の者們吾を謀叛人と言立つるより小諸に住す
るみどもならず不思儀や心の趣は拙者とても一つにて故郷を
出でし此方は疾く薩摩へ押渡り島津に請ふて人衆を借り再び
鎌倉へ乗込んで憎き北條が一族を討ち絶やさむと志し使船爲

せし其船は思ひも懸けぬ海賊船にて衣類路用を剝がむとする
に己むなき塙合と一人二人打つて懲せしに其手並に畏を爲し
てか海賊共只管詫びて拙者を首領と仰ぎ申さむと請はる、儘
に拙者も人数を要する折柄とて善からぬ事とは存じながら身
を海賊の群に投じ集めし人数は百餘人、船も二艘は手に入りし
に心勇んで薩摩への渡海は暫時思ひ止まり先づ鎌倉へ乗込ん
で北條が館へ夜襲を掛け運好く往かば北條を一舉に撃つて滅
ぼさむと、近風を待つて此下田へ船を繋ぎしか因どかり圖らず
御身に邂逅ひしは天道未だ吾々を見捨て給はぬ證なり、イデ是
よりは俱々に追風を待つて鎌倉へ乗込み、亡き人々が修羅の亡
執を一舉に晴らし申すべし、アナ嬉しや心地よやと小躍りして
勇み立ちました

泉小次郎が壯快なる言葉に朝夷義秀大に喜び
義秀、开は忝け
なし拙者も盲龜の浮木を得し心地争でか力を盡さらん……
親衛、勇ましき其御言葉、吾々共今茲に大將を得たる喜び、何かは
之に如くものあらむ……何は兎もあれ本船へ御人來を……
みれから朝夷を本船へ引連れまして最と懇ろに發應し茲に軍
事の許議に及び、朝夷義秀を大將となし人数を二ツに分けて親
衛其一艘を預り追風を待つて伊豆の下田を出帆し段々鎌倉へ
と進みまして由井が濱邊に船繫を致し、一先づ上陸して鎌倉の
様子を窺ひ夜撃を蒐げやうと云ふ心組みすると鎌倉では到る
處ッロ、引きも切らぬ人出、夜の事故、夜商人の點けた
燈火が真赤に空に映つて遙に眺むれば宛然、火事の様で御座い
ます、其賑やかある中を老いたるは手を牽き幼きは脊に負い念
佛高らかに唱へながら往くは皆な是參詣人と見えます 義秀

少々伺ひ度いが今宵此鎌倉に何か供養でもあるかな ▲ハイ
今日は建長寺様に豪らい大法會が御座います 義秀、ホ、ウ、ど
う云ふ御供養ぢやあ ▲うれは先達て戦に負けて討死をかさ
れました三浦様の大法會で御座います 義秀、ホ、ウ、三浦の法
事を致すとあ ▲ハイ和田義盛様を初め三浦九十餘輩の御方
々の御追善の爲めに大法會を営みで御座います 義秀、して
又、施主は何人ぢやの ▲ハイお施主は北條さまで御座います
義秀、ナニ施主は北條…… ▲ハイ北條泰時様と仰しやるか方
は御執權職様の御子息であらつしやいますか、えらいどうも御
仁心のお方でな和田様初め御一族御忠義筋の爲めに討死を
爲されたお方ぢや、うれぢやによつて之を捨て置いては濟まぬ
事、過ぎ逝かれた方々も嘸おし浮ぶも出來まい是非大法會
を営ますばならぬと切り御父上様に御意見を爲され御自身

朝 夷 三 郎

お施主となり今晩明晩の二夜は建長寺様で豪らい御法事鎌倉
諸山の注師一同打集つて大供養を営みますで、イヤモウ此鎌倉
は申すも更らなり三浦郡近郷近在の老若男女夜となく晝とな
く群集致しますすが、是れも皆和田様が御遣しなされた御徳で御
座いませう、御執権職様は誠に評判の悪い方様で御座います
が御別當和田様は誠に評判の好い御大名様、嗚呼思ひ出して
残念なふとで御座います、うれに感心おは執権職様の御息式
部丞様あれ程悪事を爲された北條様の様子に彼の様な御仁
心の御息が出来ると云ふは北條家はア御武運の目出度い
御家で御座いますナ。と咄すを聞いて義秀、嗚呼通れあり忝け
し、父を初め一族一統の大法會を営み呉るゝ泰時の仁心には此
義秀向ふ乃を所持たぬ、此兩日を過ぎし後は兎も角も今和田の大
注會を営み居る際に、此朝夷が大將となり北條の邸へ夜襲を蒐

朝 夷 三 郎

けしと言はれむには恩を知らざる武士と後指さされむも恥か
しく父上の爲し置かれたる仁心も水上の泡と消失せむ、什麼親
衛殿御身は兎も角此義秀今明の両夜は北條へ討入る事は爲し
難し、御止まり下さる事に相成りませうや。と言はれて親衛も實
に御道理なる仰せ、情義に向はむ乃なし、然らば今明の両日は船
に過ごして様子を観ひ其上にて事を成さむ、今日は先づ船に戻
らむと、面々舟に打乗り本船に歸りました、其翌晩のこと、大雨
は盆を覆すが如く、強風天地も動かむばかり、雄波の高まる時は
船は空中に舞ひ上がり、唯波に引かるゝ時は奈落の底へ沈みし
かど疑はるゝばかり、斯る大暴風雨に遭つては堪りません、碇
下ろせし船おれど遂に碇網も切れて離れどおあり、見る／＼中に
親衛の乗りたる船は覆へり、乗りたる人々は哀れ底の藻屑とな
り果て、朝夷の船も亦た何處の果てへ吹流されしやら更らに其

朝夷三郎終

往く所を知らず、一説には三郎朝鮮にて終りたりとも申しませぬ
 が確か筋とも聞きませぬ、北條の家は三代の式部丞泰時にて
 治まり二代の悪名を雪ぎ九代高時に至るまで連綿として繁榮
 致しましたは皆是れ泰時の爲せる仁心故で御座いませう、長々
 讀者諸君の御目を汚がしませぬが朝夷三郎の講談も本人の行
 方が知れませぬからこれにて御免を蒙り、此後は御耳新らしい
 講談を御覽に入れませぬ何卒御愛讀の程を願ひ上げます

明治卅年十一月二日印刷
同 年十一月八日發行

〔朝夷三郎〕

編輯者兼 市川路周

印刷者 本城松之助



發行所

東京神田區佐久間町三丁目三十八番地

文事堂

終

